

論文

中村地平『太陽征伐』論

—『蕃族調査報告書』との関係をめぐって—

阮 文雅

1.

中村地平（1908～1963）は宮崎出身の文学者である。彼は大正14年から昭和5年まで台北高等学校に在学し、高等学校を卒業した後、東京大学に入学した。昭和7年から台湾経験を扱った作品を続々と発表し、佐藤春夫、保田與重郎の知遇を得た。昭和10年、地平は保田與重郎らが主宰する「日本浪漫派」の同人となり、当時は紛れもなく中央文壇で脚光を浴びた新進作家であった。

『太陽征伐』は、地平が昭和15年8月『知性』に発表した作品である。昭和16年9月刊行の『台湾小説集』に収録されている。この作品は、昭和7年の「窪地のうへの白雲」、昭和9年の「人類創世」、そして昭和14年の「太陽の眼」に続くもので、台湾原住民の神話²を小説化したシリーズの最後の作品でもある。敗戦後の昭和23年、地平はこれら台湾原住民神話に基づいた物語を『太陽の眼』³に収録して出版した。岡林稔が指摘するように、これら一連の作品は地平の神話ジャンルへの「強い意欲を感じさせる」⁴ものである。

かつて地平は「人類創世」⁵の序文で、「小説の最高理念が人間の真の姿と心とを描くに在るもの」と述べて、「素朴、真卒なる古代の傳説、神話に」⁶多くの示教を得たと述べた。また「民族的な神話」⁷という随筆の中で、「ドイツ浪漫派の「神話を文学に於ける最高の形式とする考へ方、及び文学が民族的な地方的な特徴をもつべきであるといふ意見」への「強い共鳴」を表明し、さらに「民族的な神話」の創造は自身の「文学の最高理念」と断言した。そこには、地平の原住民神話作品への重視の姿勢と自己の作品への自負とがうかがえる。地平が「民族的な神話」の創造を文学の「最高の形式」

であり、「文学の最高理念」であると再三強調していることから考えて、これらの作品は、彼の小説理念や文学的な理念を托して書かれたものと推察してもよからう。

地平が神話的作品に託した文学理念は、「南方」を描く作家としての彼の本格的な出発点、すなわち日本文壇の中に「南方文学」を樹立しようとした理想に繋がってゆくとと思われる。『太陽征伐』を発表した翌月、地平は『知性』に「南方的文学」という随筆を発表し、「南方文学」の特徴に関わるいくつかの要素について、以下のように述べている。

日本にはどういう理由で、南方的な文学がもつ多くの美点が生かされてこないのであろうか。南方に発生した文学には、世界的に、たとえば明るさであるとか、楽天性であるとか、行動的描写の卓越さとか、感覚的な詩情とか、神話的空想力とか、熱情的な飛躍性とか、——その他多くの特徴をもって居り、それらはまだまだ日本文学に新しい要素として生かし得るように僕には考えられるのである⁸。

ここで彼が取り上げた「南方文学」の特徴とは、南方特有の「明るさ」や「行動的描写の卓越さとか、感覚的な詩情とか、神話的空想力とか、熱情的飛躍性とか」である。これらの要素はいずれも抽象的な概念であるが、「南方」の「風土的な特徴」と共通するものだと考えられる。台湾原住民神話によった神話的作品群は、地平が地方的な特徴と「南方文学」との関連を強調した上で執筆しているので、当然のこととして植民地台湾の内包する「南方性」を有している。

地平の死後編集された『中村地平全集』には、神話的作品はいずれも収録されなかった。しかし前述したように、台湾原住民神話を下敷きに創作した神話的作品群は、地平文学の全体像では重要な位置を占める。とりわけ『太陽征伐』の発表時期を考えると、地平が志向する「南方文学」の要素を内包する実践例と考えられる。ゆえに、地平の「南方文学」の文学的特徴および「南方憧憬」の本質を論ずるに、この『太陽征伐』は欠かせない存在である。

地平の神話作品全体に対して、かつて岡林は「地平が神話性に南方性を合

体させ、積極的に独自のロマンチズムの実践を試みた証となる作品である」⁹と指摘した。しかしながら岡林は、この「独自のロマンチズム」の本質、およびそれと個々の作品との関係を具体的には検証していない。そこで本稿では、『太陽征伐』の作品中に見出せる文学的操作を追い、地平の「南方憧憬」の本質と、それが投射する南方の表象を明らかにしていくことにする。

2.

台湾原住民の神話を再構成した神話作品群について、地平自身は「人類創世」の序文で次のように語っている。

臺灣から南洋ポリネシア、更に遠くはギリシヤなどの地、一帯に残る太陽征伐の傳説から僕がひとつの小説を構成したい、と思ひついたのはもう随分前の事であつた。さういふ心組みでいつか僕が臺灣総督府編『蕃族調査報告書』を讀んだ時、僕は心のひかれる幾つかの傳説をノートの端にとめて置いた。¹⁰

地平が「台湾を旅行したとき」に入手した『蕃族調査報告書』¹¹は、「佐山融吉、大西吉寿¹²両氏の努力」によって編纂された。神話作品群は、この報告より「一部を摘記して」発表した作品だと述べ、彼自身も「もとより創作ではない」と述べている¹³。『太陽征伐』も、地平が『蕃族調査報告書』の龐大な原住民の神話から「心のひかれる幾つかの傳説」を取り上げ、まとめた作品である¹⁴。

しかしながら、これは単に気ままに組み合わせたものではない。実際、『蕃族調査報告書』に収められた「蕃族の口碑傳説」は、長い年月を経て口承されてきた話の粗筋という形でのみ記録されている。簡素な原話を小説化した作品は、純粹な「創作」とまで言えなくても、地平によって再構成されたものであるために、そこには彼の意識の中にある南方観が投影されているのは当然であろう。そこで、各々の話についての比較表を参照しながら、原典との異同を分析することで、『太陽征伐』における地平の文学的操作を検証する。

(1) 「太陽征伐」

『太陽征伐』は、14 話の短い神話から成り立つ神話小説集である。第 1 話の「太陽征伐」は作品名と同じ題名の物語であり、以下のように 17 節に分けて各節の筋をまとめることができる。

【比較表 (1)】『太陽征伐』—「太陽征伐」と『蕃族調査報告書』との比較表
テキスト (旧字を新字に直した)

『太陽征伐』：『日本植民地文学精選集 20 [台湾編 8] 台湾小説集』ゆまに書房、
平成 13 年 (初出：『文学者』、昭和 15 年。引用は復刻版による)。

『蕃族調査報告書』：臨時台湾旧慣調査会編、大正 2 年から大正 10 年。

(同以下各比較表)

節	頁	太陽征伐	巻 頁	題 名	『蕃族調査報告書』
1	161	此の世の創め。天には日月ともになく、地は暗かつた。人人はつねに常世に在る思ひで、炬火をともすことがなければ、表も往来できない有様であつた。その暗い表を、ある日二人の男が各各炬火を片手にあるいてゐた。間もなくであつた。高い峰の辺りに楠の梢を巻く嵐の音が生じたかと思ふと、間もなくたちまち暴風が全山にあれくるつた。はげしい風の渦まきに巻きこまれて、男たち二人は天に吹きあげられてしまった。「ええままよ」二人は腹をきめた。天にとどまつて、太陽となり、下界を照らすことになつたのである。闇にとつぷりとつつまれ暗暗黒黒としてゐたこの世に、今はいちどき二つの太陽が現れた。	紗 績 族 85	太 陽 ヲ 射 タ ル 話	太古ハ天ニ日月ナク黯黒甚タル常 闇ノ世ニテ人々ハ皆松明ヲ点ジテ 往来セリ或時暴風俄ニ起リテ松明 ヲ手ニセサル者二人ヲ天ニ吹き上 ゲシニ彼等ハ其所ニテ太陽トナル 今マデ暗カリシ常闇ノ世モ一時二 箇ノ太陽ヲ得タルコトナレバ
2	161 ～ 162	泉も川も水は次第に枯れてき、乾からびた土の上には魚の白い腹が無数にひつくり返つた。草木はみるみるしぼみ、空をとぶ鳥獣の影も見えなくなつてしまつた。	タイ ヤル 族 前編 433	太 陽 征 伐 ノ 話	太古天ニ二ツノ太陽アリテツ没 スレバツ出デスクテ晝夜ノ差別 モナク熾灼タル日輪ハ下界ヲ照シ タレバ暑熱甚だシク溪泉皆涸レ草 木為ニ枯死シ人々ノ困苦ハ今ヤ其 極ニ達シタレバ捨テ置キ難シトテ
		暑さのために人びとはあべぎ苦しみ、ひ弱な子供は育つことができない。	武 藩 族 前編 249	同 上	太古ハ天ニ太陽二ツアリテ炎熱焼 クガ如ク為ニ幼兒ノ死スル者算ナ クスクテアラバ人類モ絶滅スベキ 有様ナリキ

		大人も戸外に出るときは、薄板を背負つて、陽の光りをさけなければならなかつた。	獅設社 329	同上	太古太陽ニツアリテ光熱甚シク山羊ノ皮ヲ被ルモ忽チ損ジテ二度ノ用ヲナサズ箕ニテ蔽ヘバ身体痛ク腫レ上ル程ナリキ
		夜といふものがなく、ひと眼がうるさいためにボエヒエも思ふにまかせない。「かくては、人類は絶えてしまふであらう」人人は憂慮した。	紗績族 85	太陽ヲ射タル話	眩クシテ物ヲ見ルコト能ハズ炎熱ハ赫灼トシテ肉K体ヲ腐ラスガ如ク殊ニ昼夜ノ区別モナク燦然タル金輪ノ光ヲ仰ゲバ何時「イナ」ニ近ツクベキ
3	162	ある日であつた。一人の女が、乳呑み児をだいて畑に出た。地べたに、女は箒をたて、子供をその蔭に寝かさうとした。しかし、箒が落とす影は短かく、子供の体をおほふに足りない。女は子供の体にもつてあつた雨合羽をかぶせ耕作にとりかかつた。間もなく、ふつと、女は雨合羽の下を覗いてみた。そこには子供の体はなかつた。五六匹の蜥蜴がぎらぎらした体で這ひまはつてゐるばかりである。子供は太陽の熱のために、溶けてしまつたのちがひなかつた。あまりと言へば、あまりである。女は嘆き、悲しみ、部落に帰って、それと告げた。			(該当箇所なし)
4	163	今は早や、かくてあるべきではなかつた。部落の一同は額をあつめて相談し、ふらちな太陽を征伐することに議はきまつた。屈強なわか者が三人、その大任をはたすために選ばれた。	タイヤル族 前編 433	太陽征伐ノ話	社衆一箇所ニ集リテ太陽ヲ射殺スベシト議シヌスクテ社人ノ中ヨリ屈強ノ青年三名ヲ選ビテ其任ニ當ラシメタリ彼等三人ハ大ニ勇ミ男ノ中ノ男ナルソ首尾ヨク太陽ヲ射ズシテ歸ルコトノアルベキト猛進セリサレド
		誉れの白球美々しく縫ひつけたラタン身軽に着よそほひ、大弓手ばさみ、鋭刀おつとつた武者ぶり、勇士たちのいでたちはまことに男のなかの男とは見える雄雄しさであつた。勇みに勇み、部落をあとに彼らは太陽への道へと出でたつた。			(該当箇所なし)
5	163	しかし、その道は容易ではなかつた。行けど、行けど、ただ茫漠とした荒原がはてしもなく、つづいてゐるばかりである。目的地にはいつ着くともわからない。	同上	同上	道遠クシテ行ケドモ行ケドモ際限ナク何時目的地ニ達スベキカ早ヤ數十年ヲ經タレドモ未ダ其半バニモ達シ得ズ前途

6	163	頭上を去来する雲とともに、歳月は徒にながれ来たり、ながれ去り、さしもの勇士たちも、いつしか白髪の老人となつてしまつた。今は手足もやせ衰へ、心ばかりがいや猛にはやるのみで、他の二人は最後の努力をふりしぼつて、目的地へ急ぐことに議がきめられた。帰来した勇士の一人から、部落の者たちは仔細を耳にした。そして、太陽征伐の壮舉、容易ならぬことを一同は悟らねばならなかつた。改めて彼らは遠大な計画をたて直した。	同上	若リシ青年モ今ハ頭髪皆白ク手足ハ瘦セテ力ナク老衰シタレバ斯クテ進ムモ目的ヲ達シ得ザルベシ思ヘバイトモ悔シケレド一名ハ社ニ歸リテ應援ヲ頼ムベシトテ一人ヲ歸シヌソノ者歸社シテ事一伍一什ヲ物語リテ数名ノ乞ヒケレバ社人モ始メテ道ノ遠キヲ知り
7	163 ～ 164	即ち、勇壮健脚の青年数名をえらび、各々その背には後鬣を托すべき嬰兒を背負はせ、蜜柑・枇杷・栗などの糧食も十二分に用意させ、ひきつづき改めて出発させることに決つたのである。新しく選ばれた勇士たちは行く行く、栗・蜜柑・枇杷などの種をまき、韋駄天走りに走りつけて、先発隊の跡を追つた。やうやく追ひついて、見ると、出発の二勇士は既に齒落ち、肉衰へ、脚の運びも怪しげといふ、無慚な有様である。	同上	然ラバ各一名ノ幼児ヲ背負ヘヨ汝等死ストモ彼ヲシテ其志ヲ繼ガシムベシト彼ハソレヨリ韋太天走りニ道ヲ急ギタリ此度ハ行ク行ク途ニ蜜柑及栗ヲ播キテ進ミ漸ク先ギノ二名ニ追ヒツキタルニ見レバ歩行モ自由ナラズ齒抜ケ類肉落ちテ言葉モ不明ナリサレド
8	164	しかし、応援隊の到着はさすがに嬉しかった。とめられるのをおしきつて、若者に負けじと彼らも弱足踏んばつてたちあがると、ともどもにそこを出発し、目的地へと急ぐことになつた。しばしが程は跟いて走ることができた。しかし、寄る年なみには争はれず、間もなく眼くるめき、よろめくよと見る間に、ばつたり地面にうつぶして、息も絶えた。	同上	応援隊ノ到ルヲ見テ喜ビ我レ老イテモ未ダ若者ニ負ケジト足ニカバラシテ起チ上リ行クヲ見レド目眩ミ足ハ一歩モ進ミ得ズ此所ニ其儘斃レタリ
9	164	青年たちは哀れな老勇士を路傍に葬ると、暗然としてゐたが、かくてあるべきではなかつた。勇を鼓してすすまなければならぬ。	同上	後ヨリ行キシ者共ハ其様ヲ見テ一時ハ呆レ居タリシガカクテアルベキニアラザレバ屍ヲ路傍ニ葬リテ尚ホ先キヘ先キヘト進ミ行クコト
10	164	かくてふたたび数十年の歳月はつかの間にながれ来たり、ながれ去つた。道は遠く、齢のみ徒らにかさねてゆく。応援隊の面も次ぎ次ぎに斃れて、残るのは彼らの背に負はれてきた子供たちばかりとなつた。子供たちも今は既に立派な勇士に成人してゐる。やうやく成人した三人は、目的地へと達することができた。太陽は眼の前にある。喜び勇み、弓に矢をつがへると、彼らは力をこめていつせいに太陽めがけて射た。	同上	數年然ルニ應援隊ノ人々モギ次ギニ斃レテ殘ルハ始背負ハレ來タリシシ三名ノミナレリ彼等漸ク目的地ニ達シ矢ヲ番ヘテ太陽ヲ射タモ
11	165	しかし、異然と音がしたただけであつた。矢ははね返され、太陽は蔑むごとく、地のはてに没してしまつた。	同上	何ノ手應ヘナク太陽ハ西ニ入りヌ之ハ為做シタリト思ヒ次ギニ來リシ太陽ヲ逸シマジト

		ちがった、新しい太陽がのぼってきた。勇士たちは用意してみた鼠の陽物を矢の先につけた。	タイヤル族前編327	太陽征伐ノ話	心ヲ取り直シ鐵ノ熊ノ陰莖ヲ嵌メ(太陽ガ崖ノ上ヨリ出ヅルヲ待チ構ヘ狙フ定メテヒョウト放テバ誤ダズ矢ハ其中央ヲ射ル)
12	165	ふたたび狙ひが定められた。矢は弦をはなれ、見事に太陽の眼を射貫いた。血しぶきが辺りに飛びちり、勇士の一人にふりかかった……と、見る間に勇士は頭蓋骨がくだけて無惨な死をとげた。	タイヤル族前編433	太陽征伐ノ話	狙ヲ定メテ矢ヲ放テバ矢ハ飛ビ行キテ其中央ヲ貫キ見ル見ル中ニ血塊ハ湧クガ如クニ落ち來リテ人ヲ打チテ頭バ頭骨砕ケテ髑ルタリサレド
13	165	同時に太陽も狼狽して、地上にころげ落ちた。喜んだ勇士の一人が手をひろげてつかまうとすると、太陽は腕の間からすると通げてしまふ。苛だった男は指さきに唾をつけると全身の力をふるひやうやく太陽の頭をおさへつけた。	武崙族前編198	太陽征伐ノ話	太陽モ狼狽シテ地上ニ顛墜セシカバ彼ハ五指ヲ開キテ掴マントセンシニ太陽ハ指間ヨリ通レテ掴ムヲ得ズ彼少シク竝立チ何ヲ小癩ナト指先ニ唾ヲツケテ宛モ蚤ヲ押フルガ如ク太陽ヲ頭ヨリ押シ潰シヌ
14	165 ~ 166	勇士の腕の下から、細ぼそとした声をだして太陽は訴へるのである。「言ひたいことがあるから、ちよつとまつてくれ。いつたい、お前たちが毎日生活してゆくのは誰のお蔭であるか。俺たち二人があるからこそ、草木も育つてゆくのではないか。それなのにお前たちは、報恩の志薄く、かつて俺たちのために、ただの一度のお祭りさへ催したことがないではないか。だから俺たちも怒つて、このやうに照りつけたのだ」	武崙族前編198	太陽征伐ノ話	其時太陽下ヨリ虫ノ声ニテ物申サン暫ク待テ何ニガ故ニ汝ハ我ヲ斯克苦ムルノ我今汝ニ不意ヲ打タレテ敗北スト雖他日必ズ他ノ太陽ト協力シテ汝等ノ生命ヲ斷ツベシト來汝等ノ日々生活スルハ誰ノ恵ノヤ皆之レ我等二人ノ為ナラズヤ我等アレバコソ草木モ成長シ水モ流ルレ然ルニ汝等斯ル大恩ウケナガラ少シモ報恩ノ
		言はれてみれば、一応の道理がある。勇士たちも、悔悟の念切りに湧いてきたから、携へてみた蕃布をもつて、太陽の眼からながれ出る血汐をぬぐつてやつた。将来は月に一回太陽のために祭事を催す約束もした。太陽は片手で目をおさへると、弱弱しい姿で、天に戻って行った。現在の月はこの哀れな太陽のなれの果てである。そして、今尚のこつてゐた月の隈は、その時蕃布で拭はれた血糊の跡である。	武崙族前編198	太陽征伐ノ話	弱リナガラモ猶ホ底ニカアル言葉ニテ事ノ道理ヲ論セシカバ彼モ始メテ己ガ非ヲ識リ然ラバトテ携ヘタル蕃布ヲ出シテ流ルル血潮ヲ拭ハシメ且ツ爾後ハ必ズ毎月祭ヲ行フベキヲ約シテ帰レリ今ノ月ハ即チ射ラレシ後光熱ヲ失ヒシモノニテ月中ノ模様ハ其時目ヲ拭キタル布ナリ
15	166	いつばう、生きのこつた二人の勇士は、揚々たる気もちでその場をひきあげた。「行きの千里は帰りの十里」であつた。住路に植ゑ残して置いた蜜柑や、枇杷は今は枝枝いつばいに豊かな実をつけて居り、栗も十二分に実つてゐた。二人はそれらをちぎり、ちぎり、飢渴をしのぎながら、なつかしい故郷の部落にと戻つて行った。	タイヤル族前編433	太陽征伐ノ話	殘ル二人ハ祈願成就ト喜ビ勇ミテ歸社シタリ其時先キニ植エタリシ蜜柑ハート抱ノ大木トナリ居タリ彼等二人首尾ヨク社ニ歸リシガ

16	167	部落には誰一人として、勇士たちを知つてゐる者としてなかつた。勇士たちは言葉をつくして事情を語つた。部落の人たちもやうやく合点し、曾祖父たちから語りつがれてゐた勇士たちこそ、あなたがたであつたかと、大いにその功を謝した。赤ん坊でこの部落を出発した二人は、この時既に白髪瘦軀の翁になつて居り、總總した髯が、胸のあたりまで垂れてゐたのである。	同上		誰トテ知ルモノナク何所ノ人ナラントイ怪ミ見ル者ノミナレバ我等ハ太陽征伐ニ出デタルモノナリト言葉ヲ盡シ手足ヲ動カシ添ヘテ物語リタレバ漸ク合點シテソハ三代以前ノ事ナリト聞キ居タリシ昔噺ノ其子カト白髮黧顔ノ老人ヲトラヘテ
		部落の人たちは、二人の老人を中心に円陣をつくり酒宴を催した。人人は大いに二人の労をねぎらつた。	タイヤル族前編327	太陽征伐ノ話	皆ノ者共喜ベト酒宴ヲ張リテ祝ヒタリ
17	167	ミタワケ 見よ天を ミタクシヤ 天には烈烈たる陽光 マラハンゲ 見よ地を マラハンクシヤ 地には浸漫たる河水 一同は即興の詩を賦して歌つた。			(該当箇所なし)

第1節は、太古の闇に、松明を持つ二人の男が嵐に遭遇し、天に吹き上げられ、そして太陽が二つ存在するようになった、という筋である。この二つの太陽の由来は紗績族の神話によつたものであるが、次節以下の「太陽征伐」の話は、原住民神話に散見する太陽征伐の筋によるものである。

第2節は、太陽が二つ存在することによつて人々が苦しむ様子を叙述する。人間が太陽に苦しめられている様子としては、その灼熱による自然環境の破壊、子供の成長の妨害、被り物を必要とする外出、そして夜がないことによる男女の交合の妨害などが書かれている。これらの太陽に被害を受ける描写は、それぞれ異なつた原話から摘録したものである。ただし被り物は、原典では山羊の皮であるが、地平によつて薄板に変えられた。また、同じ神話集である「人類創世」の中に「天」という短編神話があるが、その内容は昔天が低かつたせいで人々は薄板を背負つて出かけたことや男女の交合が妨げられたといった、この作品のプロットと共通する描写が見られる。

世の創めには、天が非常に低くて、月は太陽よりも熱かつた。それ故、昼夜の区別といふものはなくて、人類は安い思ひもせなんだ。

表を歩くのは、わりに陽の柔かい日中にすましたのだが、それも薄い板を背にせねば、堪へられなかつた。ましてや、それよりも烈しい月がでる時には、屋内深く、身を隠してゐるより仕方がないのであつた。夫婦といふのも名ばかりで、『ボエヒエ』なども思ふにまかせないから、これでは、「人類もやがて、滅びるであらう」と、人人は嘆息した。¹⁵

このことから、地平はこのような神話に格段に面白みを感じていると推察できる。

第3節は、二つの太陽の炎熱によつてもたらされた、もっとも大きな被害についての描写である。この部分は、『蕃族調査報告書』の神話には該当箇所を見出せない地平の創作である。

ある日であつた。一人の女が、乳呑み児をだいて畑に出た。地べたに、女は箒をたて、子供をその蔭に寝かさうとした。しかし、箒が落とす影は短かく、子供の体をおほふに足りない。女は子供の体にもつてゐた雨合羽をかぶせ耕作にとりかかつた。間もなく、ふつと、女は雨合羽の下を覗いてみた。そこには子供の体はなかつた。五六匹の蜥蜴がぎらぎらした体で這ひまはつてゐるばかりである。子供は太陽の熱のために、溶けてしまったのにちがひなかつた。¹⁶

太陽の熱で子供が「間もなく」溶けてしまった。この大げさな被害描写は、第2節の「乾からびた土の上には魚の白い腹が無数にひつくり返つた」という魚の大量死の描写とは明らかに被害の深刻さに格差が出てくる。深刻さについてのこのような描写は、地平の想像力の豊かさの賜物であろう。

第4節から第10節の物語は、タイヤル族の「太陽征伐ノ話」に拠つたものである。ただし、擬人化された太陽が地面に落ちた後、勇士に捉えられ、太陽は自分の貢献を労うように勇士たちに祭りを要求するという第14節と第15節の話は、下敷きにされたタイヤル族の原話にはないが、原典の他の「太陽征伐ノ話」に散見する。詳しく分析した結果、武崙族の神話「太陽征

伐ノ話」から摘録している可能性が高いことが分かった。

第 12 節の太陽を矢で射落とすクライマックスの場面であるが、タイヤル族の原話では、「太陽ヲ逸シマジト狙ヲ定メテ矢ヲ放テバ矢ハ飛ビ行キテ」と、ただ普通の矢を使っているのに対して、地平は「勇士たちは用意してみた鼠の陽物を矢の先につけた」と改編している。しかしこの「鼠の陽物」をつけた矢を使って太陽を射たことについては、地平の完全なる創造とも言えない。なぜなら、タイヤルのもう一つの「太陽征伐ノ話」には、鏃に熊の陰莖を嵌める矢を使う話が、そしてもう一つの北勢蕃の同名の話には、「木鼠ノ陰莖ヲ矢ノ先キニ付ケテ射タル」記述があるからである。こうした記述をふまえて、地平は原話に基づきながら、普通の矢の代わりに、動物の陽物をつけた矢を勇士に使わせたと見られる。この様々な工夫は、当然「南方的文学の特徴」を文脈に潜ませるためだと考えられる。

最後の第 18 節は、原住民が勇士を囲んで催した酒宴の席でつくった即興歌の内容である。「ミタワケ ミタクシヤ マラハンゲ マラハンクシヤ」とカタカナで表記した歌であるが、その下に「見よ天を 天には烈烈たる陽光 見よ地を 地には漫漫たる河水」と日本語で訳文をつけている。原典の口承伝説には、歌またはそれに類する記述は一句もない。

人々を苦しめる烈々たる太陽を征伐するために一生を費やし、その壮举を遂げたばかりの勇士の労をねぎらうために歌う歌だとすれば、「見よ天を 天には烈烈たる陽光」という語句は、多少不適切とも思われる。だが、地平が創作したと思われるこの異民族の言語による歌を結文に置く構成は、文章の調子を強調すると同時に、浪漫的な情緒をも自然に感じさせる機能を持つ。地平が意図的に施したこれらの工夫は、まさに文学表現上の配慮を意味している。

(2) 「穿山甲と猿」

【比較表(2)】『太陽征伐』—「穿山甲と猿」と『蕃族調査報告書』との比較表

節名	頁	穿山甲と猿	巻頁	題名	『蕃族調査報告書』
1	168	むかし。穿山甲は神さまの腰かけだつたのである。しかし、鱗があるので、神さまは、「お尻がいたいよ、いやだよ」とおつしやつて、おやめになつてしまった。	獅 設 族 404	穿山 甲ノ 話	昔穿山甲ハ神ノ腰掛ナリシガ鱗ノ為ニ尻痒キトテ其後癡セラレタリ
2	168	その時以来、穿山甲は所在がなくて、のろろと暮してゐたのである。ある晴れた日であつた。穿山甲はこれも意けものの猿に、路傍であつた。「退屈だね…。なにか面白いことはないかね」「いつたい、面白いことなんて、この世に在るかね。俺はあきらめてゐるよ」「釣にでも行つてみるか」			(該当箇所なし)
3	169	草原径を降り、二人は溪流へと降りた。穿山甲はたちまち、蟹や、魚をたくさんつかまへた。魚を一匹もとることができない猿はぼんやりと眺めてゐたが、間もなく訊ねた。「どうすれば、そんなに捕れるのかね」「手を叩いて見給へ。いくらでもとれるから…」からかはれたとは知らず、言はれたとほりに猿はした。たちまち猿は悲鳴をあげた。指がちぎれるくらゐに痛かつたのである。しかし、猿は我慢してゐた。			(該当箇所なし)
4	169	間もなく、二人は草原径をのぼり、涼しい樹の下蔭に座り込むと、獲ものの魚を焼きにかかつた。「折角のご馳走に飲みものがないとは惜けないね。			(該当箇所なし)
5	169 ～ 170	君、水でも汲んでこないか」穿山甲が言つた。「よしきた」身軽に猿がたちあがつた。溪流に降りる草原径へきたときであつた。猿はふつと右手を跳た。赤くはれあがつてゐる。いまいましてたまらない。猿は道ばたで竹筒をひろふと、そのなかに尿を入れた。そ知らぬ顔をして戻り、竹筒を穿山甲にわたした。「すまん、すまん」はしやぎながら、穿山甲は竹筒を口にもつて行つた。たちまち顔をしかめた。「臭い！この水はおかしいぞ」「臭いとは変だね。そんな筈はないが…」猿はもつともらしい顔つきをして、首をひねつてみせた。	曹 族 四 社 蕃 164 ～ 165	穿 山 甲 ト 猿 ノ 話	昔穿山甲ト猿アリケリ一日共ニ河ニ出デテ漁シ多ク魚ヲ得テ帰リ二人ニテ先ヅ魚ヲ食ハントテ坐セシニ「アルム」ハ「タブサツグ」ニ向ヒ汝行キテ水汲ミ来シト命ジケレバ「タブサツグ」ハ命ゼラルル俣ニ屋外ニ出デ稍アルテ尿ヲ竹筒ニ入レテ持チ帰リ「アルム」ニ之ヲ渡シ察知ラヌ顔シテ魚ヲ食ハントセシニ「アルム」ハ竹筒ヲ受取りテ将ニ水ヲ飲マントロワ竹筒ニ当ツレバプント衝キ来ル臭氣ニ目モ暗マン許ナリ「アルム」ハ大ニ怒リ汝ノ汲ミ来リシハ水ニアラデ小便ナラズヤ之レシ臭氣ヲ嗅ゲト差シ延ベタルヲ受取りテ落チツキ私ヒ云ヘルヤウ我レニ小便ヲ汲ミ

6	170 ～ 171	しばらく穿山甲は猿の顔を覗みつけてあだが、間もなくぶりぶりしながら、竹筒をとると自分で河原へ降りて行つた。魚は頃あひに焼けてきた。一つつまみ、二つまみ、猿はみんな平げてしまった。穿山甲が帰ってきた。「いまおとも大きい、見たこともないやうな大きい鳥がとんできてね…」魚が口から出てきさうになるのを、やうやくおさへ、おさへ、猿はいかにも弱りはてたやうな口調で訴へた。「…魚を食つちやつたんだよ。どうにも申しわけがない」	同上	彼ノ留守跡ニテ魚ヲ残ラズ食ハンモノト一尾ヲロコ入レー尾ヲ右手ニ更ニ一尾ヲ左手ニ持チ嚼ムコトモセデ先ズ右手ノ魚ヲロコ入レソレヨリ左手ノ魚ヲモロコ入レテ類張り空手トナレバ又爪ミテロコ入レ喉モ膨レテ今ハ入ルルコトモ出テ来ズ時々ハロコノ魚外ニ落チントスルヲ指ニテ押シ込ミ挿シ込ミスクテ其場ニアリシ獲物ヲ悉皆口中ニ入レソレヨリ「アルム」ノ矢ヲ弓ニ番ヒテ石ヲ射テ其鏃ノ先キヲ圓クシ元ノ位置ニ踞蹠シテ素知ラヌ顔シテ待チ居タリ暫クシテ「アルム」掃リ来リテ庭ヲ見ルニ魚ハ一尾モナシ驚キテ如何ニモシヤト尋ネシニ大鳥一羽飛ビ来リテ魚ヲ尽クサラヒ行ケリ
7	171 ～ 172	穿山甲はすぐに猿をうたぐつた。「あんまりな真似をするなよ」しかし、猿は顔をまつ赤にして、抗弁する。「俺といふものが、信用できんのかなあ。困るなあ」間もなく穿山甲はいいことを思ひついた。傍らに落ちて棒ぎれを片手ににぎると穿山甲は、「えい」と気あひをかけ、地面から一尺ばかりもとんでみせた。「お前はこんなに飛ぶことはできないだろ」元来が猿は負けざらひである。さつそく同じやうに気あひをかけ、力いっぱい地面からとんだ。しかし、地べたにつくと同時に、腹にたまつてあつた糞尿が一時にどつとながれ出てしまった。そのなかには魚の骨がたくさん混つてゐる。証拠があまりはつきりしてゐるので、さすがの猿もどうにもならない。顔をあからめて平謝りに謝つた。穿山甲は仕返しをしてやらう、と思つた。	同上	「アルム」ハ汝コソ其盜賊ナラメト詰リシニ「タブサツク」モ顔ヲ赤ラメテ立腹シ二言三言ノ争ニ然ラバトテ「アルム」ハ竹杖取りテ其身モ輕ク飛ビ上リ再ビ飛ビ下リテ其竹杖ヲ「タブサツク」ニ渡シ汝モ斯ク飛ビテ見ヨト云ヒシニ元來負ケ嫌ヒノ「タブサツク」ノ事ナレバ謀ラルルトハ露シラズ早速竹杖ツキテ飛ビ上リ手ヲ放チテ飛ビ下リシニ多ノ魚ヲ食シタルコトナレバ地面ニ着キヤ腹ニ溜リシ糞尿ハ一時ニトド流レ出シソノ中ニ数多ノ魚ノ骨アリケレバ証拠充分ナリトテ「タブサツク」ノ敗ニ帰シヌ其後再ビ二人ニテ山ニ赴キ茅ヲ焼カントセシ時「アルム」窃ニ此時コソ報復セント思ヒテ
8	172	猿を誘つて、茅の穂の生ひしげつた野原に出かけた。「俺は原つばのまんなかにあゐる。この茅に火をつけて見給へ」穿山甲が茅の穂のなかに姿を消したとき、猿は原の一端に火をつけた。火は風にあふられ空も焼かんばかりの炎となつて燃えひろがつた。原いちめんをなめつくし、炎が消えたとき焼野の跡から、穿山甲はけろりとした顔つきで現れた。地に穴をほつて、そのなかに隠れてあつたのである。猿はびつくりしてしまつた。	同上	ロヲ開キテ云ヒルヤウ今我等茅ヲ焼カントス誰カ此茅ノ中ニ居ル者ゾ汝ノ如キ怯懦ナル者ハ火ヲ見バ戦クコトナラント侮リシカバ「タブサツク」ハ云フヤウ汝ニ出来ルコトハ我ニモ出来ルナリト然ラバ我先ツ茅中ニ入ラントテ「アルム」ハ早速茅ヲ分ケツツ中ニ入りヌ時期ヲ見計ヒテ「タブサツク」ハ茅ニ火ヲ点ゼシニ火ハ風ニ煽ラレテ忽チ焼キ尽シヌ然ルニ「アルム」ハ瑣ノ負傷モナク石ノ上ニ乗リテアリケルヲ見テ

9	172 ～ 173	<p>「をかしの奴だ。よく焼けて死ななかつたな」平気な顔で、穿山甲は答へた。「なあに、乾いた茅の葉つばを背につけて、地べたにうつ伏せになつておれば、平気なものさ…」猿は感心して聞いてゐた。「…お前もひとつ、やつてみるか」否応はなかつた。とびあがり者の猿は、さつそく別の、新しい茅の原に姿を消した。「さあ、火をつけてくれ」原がまつたく焼けてしまつたのち、あはれな猿は黒こげになつて死んでゐた。</p>		<p>「タブサツグ」ハ如何ナレバ汝ハ火ニモ焼ケザルヤト尋ネシニ「アルム」ハ我レ乾キタル茅葉ヲ体ニ纏ヒテ打チ伏シ居タリト答エタレバ「タブサツグ」モ点頭シツツ我モ其ノ如クセント教ヘラルル俛ニ茅ノ葉ヲ着テ叢中ニ入りヌ「アルム」ハ時コンヨケレト火ヲ放チシニ黒煙ヲ揚ケ凄然タル音シテ茅野ハ焼ケタリ焼跡ニハ黒キ塊アリ見</p>
10	173	<p>穿山甲もさすがに気の毒になつた。猿の腹をさき、胆をぬきとり、ふたたびもとのやうに縫ひあはせ、禁圧をした。猿はふたたび息をふき返した。あまりひもじかつたので、生き返つた猿は傍らに落ちてゐた自分の胆をひろふと、口のなかに入れて、食べてしまつた。穿山甲は呆れ、はやしなから、その場を逃げた。「自分の胆を食ふとは馬鹿な奴だ」猿はなんのことも、わけがわからず、ぼかんとしてゐた。</p>	同上	<p>「アルム」ハ其腹ヲ割キテ肉ヲトリ再ビ元ノ如ク縫ヒテ呪禁シケルニ焦死セル「タブサツグ」ハ又再ビ元ノ形ト成リニケリ「タブサツグ」ハ息吹き還シテ見レバ腹ニ一物モナク餓ヲ感ズルコト甚シカリシカバ傍ニアリシ肉ヲ取りテ食フヲ見タル「アルム」ハ己レノ肉ヲ食フトハ恐シキ者ヨト嘆ジツツ逃ゲテ行ク「タブサツグ」ハ不思議ノ事ヲ云フモノト</p>
11	174	<p>翌日、山径で猿と穿山甲とはまた行きあつた。穿山甲は猿の姿に気づくと、あわてて逃げださうとした。しかし、その背に猿はやさしく呼びかけた。「きのふのことなんて、俺はなんとも思つてないよ。もう、お互ひに仲善くしようではないか…。けふは二人で木の実でも採りに行くか」</p>		(該当箇所なし)
12	174 ～ 175	<p>すずめられるままに、穿山甲は猿のあとからついて、林のなかへ入つた。大きな樹の枝に赤い実がいつばい、なれるだけなつてゐた。猿はその樹によち登つた。猿は、うれしさうな声をだしながら、かたはしからその実をもいで食べてゐる。穿山甲は我慢ができなくなつた。恨めしさうな声をだして、地上から上をふりあふいだ。「おーい、俺にもひとつ落ちてくれよ。殺生なことをするな」まぶしい空の色に、大きな枝がつき出てゐてそこに猿が腰かけてゐた。「なあんだ、まだ、そこにゐたのか」初めて気がついたやうに、猿は答へ、木の実をもぐと、股の間に入れ、それから、地上に落ちてやつた。穿山甲はその傍に、口を寄せて行つたが、たちまち叫んだ「臭い！ たまらない！」頭上から嘲笑する猿の声が聞えてきた。穿山甲は腹がたつた。しかし、きのふのこともあるので、我慢してゐた。</p>	同上	<p>今ヨリ二人ニテ山ニ行キテ木ノ実ヲ採ラント誘ヒシニ「タブサツグ」モ同意シテ共ニ山ニ行キタリ見レバ大樹アリ其実熟シテ今ソ食フベキ時期ナレバ「タブサツグ」早速樹枝ニ登リテ其実ヲ食シ嬉々トシテ其味才美ナルヲ賞玩シケルニ下ニ止マレル「アルム」ハ耐ヘ兼ネテ我ニモ一ツ好キ物ヲ与ヘヨト乞ヒケルニ「タブサツグ」ハ云フヤウ汝ハ既ニ家ニ帰リシト思ヒシニ未ダ樹下ニ居ルヤヨシヨシ今甘キ物ヲ見ツケテ遣ラントツツ取り股間ニ挿シテ投ゲヤリス「アルム」ハソヲ受取りテ食ハントスレバ臭気酷シク思ハズ臭シ臭シト叫ビシニ「タブサツグ」ハ上ニテ呵々ト笑ヒシトナン</p>

13	175 ～ 176	間もなく、猿は樹の幹をすべり降りてきた。猿と穿山甲と連れだつて、人間の家に遊びに行つた。その家には若い後家の女が寂しく独り住つてゐる。女はなれなれしく猿のそばへ寄つてきた。穿山甲を顧みようともしない。猿は得意になりこれ見よがしにふるまつた。穿山甲はくやしかつた。「衰れな猿め、お前は人間とキソジュすることもできないくせに…」穿山甲ははやしたてた。はづかしめられて猿と女とはまつ赤になつた。女は腹を立て、傍らに在つた棒ぎれをひろふと穿山甲を家から追ひ払つた。穿山甲はその場から逃げ去つた。ひとりでいい男がり、猿は得意な気もちになつてゐた。しかし、間もなく、ふつと気がついて見ると、股間はいちめん赤い血で染つてゐた、いつの間にかあるべきものをちよんぎられてゐたのである。猿は大に恥ぢ、まつ赤になつて、林のなかへと逃げこんだ。	排 湾 族 303	穿 山 甲 ト 猿 ノ 話	其ヨリ二人社ニ帰リ今日ハ婦女ノ許ニ到リテ遊 バント約シタ方二人ニテ一人ノ女ノ家ニ赴キシ ガ女モ何時モノコト、テナレナレシク猿ノ側ニ 寄リタレバ穿山甲ハタマリカネ猿ヨ汝ハ「キソ ジュ」スルコト出来ザルニト云ヒシニ猿ト女ハ 腹ヲ立テ何ヲ云フゾ汝ノ如キモノニ誰カ恋スル モノゾト侮辱シタレバ穿山甲モ居タタマラズ其 場ヲ去リテ逃ゲタリ其ヨリ猿ハ腰掛ニ腰ヲオロ シテ休マントスル機ニフト股間ヲ見レバ一面ニ 血ニ染マリアリコハ不思議ヨト唾ヲ吐キツツ触 リ見レバ糞丸ナシ猿モ其ヲ知りテ大ニ恥ヂ其俣 走り去レリトナン
----	-----------------	--	--------------------	---------------------------------	---

『太陽征伐』第2話の「穿山甲と猿」は、『蕃族調査報告書』の中で「太陽征伐」と同様、各族に共通して伝えられている話である。地平の話は、おむね三族の原典から摘録して構成したと考えられる。第1節は、獅設族の穿山甲は神様の腰掛けだったという話によつたものであるが、作品「穿山甲と猿」そのものは、曹族の穿山甲と猿の知恵比べの話を中心にしたものである。最後の12節は、排湾族の「穿山甲ト猿」の話から、猿が人間の後家の女性を訪ねる部分を取り上げて構成したものである。この構成は、地平がもともと第5節から第11節までは、原典の話に拠つてそのまま記録した上で、第1節の「穿山甲ノ話」と最後の第12節を意図的に付け加えた作品であることを示している。よつて、原典に該当箇所が見あたらない第2、3、4節は、第1節の話をつなぐために書いた段落であり、本作品の主な筋に大きな変化はもたしていない。

「穿山甲と猿」の話に付け加えられた第1節は、以下のように短い説である。

むかし。穿山甲は神さまの腰かけけだつたのである。しかし、鱗があるの、神さまは、「お尻がいたいよ、いやだよ」とおつしやつ

て、おやめになつてしまった。¹⁷

これは、神と動物とが対話可能な世界での出来事であり、神話の大きな特徴ともいえよう。末尾につけ加えられた第 13 節は、以下引用するように、猿が人間の女性と仲良くなるが、自分が辜丸を失ったことに気づき、逃げてしまった話である。これもまた、日常を共有するほど動物と人間の距離が近く、両者のコミュニケーションが成立してしまう非現実的な話である。

猿と穿山甲と連れだつて、人間の家に遊びに行った。その家には若い後家の女が寂しく独り住つてゐる。女はなれなれしく猿のそばへ寄つてきた。穿山甲を顧みようとしめない。猿は得意になりこれ見よがしにふるまつた。穿山甲はくやしかつた。「哀れな猿め、お前は人間とキソジユすることもできないくせに……」穿山甲ははやしたてた。はづかしめられて猿と女とはまつ赤になつた。女は腹を立て、傍らに在つた棒ぎれをひろふと穿山甲を家から追ひ払つた。穿山甲はその場から逃げ去つた。ひとりでいい男がり、猿は得意な気もちになつてゐた。しかし、間もなく、ふつと気がついて見ると、股間はいちめん赤い血で染つてゐた、いつの間にかあるべきものをちよんぎられてゐたのである。猿は大に恥ぢ、まつ赤になつて、林のなかへと逃げこんだ。¹⁸

猿は人間の後家の女に近づいたが、辜丸を失っていたので、「人間とキソジユすることもできない」と穿山甲にはやしたてられた。そして、猿自身はこのことに気付き、「大に恥ぢ、まつ赤になつて、林のなかへと逃げこんだ」。こうして辜丸を失うことは、男性性を失うことと繋がっている。

この話では辜丸と男性性とが深くかかわっていると暗示しているにもかかわらず、次の「巨人伝」の巨人は、辜丸を抜かれてもおお婦女を姦してしまう人物である。

(3) 「巨人伝」

【比較表(3)】『太陽征伐』—「巨人伝」と『蕃族調査報告書』との比較表

節名	頁	巨人伝	巻頁	題名	『蕃族調査報告書』
1	176	むかし。 阿里山にたいへん体の小さな男がゐた。いつも部落の仲間たちに侮られてゐるので、本人はもとより、両親たちも、どうかし身長をのばしてやりたいと考へてゐた。豚の体重を増さうと思ふとき部落ではその牽丸を抜くのが普通である。その習慣から思ひついて、ある日、彼の母親は彼にその手術をほどこしてゐた。	曹族 108 ～ 109	牽丸 ヲ 抜 キ テ 大 男 ト ナ リ シ 話	昔或男アリケリ体甚ダ短小ニシテ社ノ笑物タリシカバ両親モ痛ク心ヲ悩マシ如何ニモシテ身長ヲ延バサント苦心シケリ然ニ社人ハ時々豚ノ牽丸ヲ抜キテ体軀ヲ増サシムルコトアルヨリ彼ニモ其術ヲ施サント母ナル人ハ或日彼ノ牽丸ヲ抜キ取レリ
2	176	みるみるうちに、背だけがのび、体重が加はつてきた。半歳たないうちに、檜の梢よりも高た。たとへば、獣でもさがさうと思ふ時は、二つの山腹に脚をふまへ溪谷にまたがり、両側の藪をかきみだす。すると、獣たちは、あわてて谷間にとびだしてくる。彼は股の下に逃げてきた獣をひつつかみに捻りつぶす、といふわけである。五体が巨きいので、住まふべき家もない。山腹の洞穴に寝起きし食物は毎日母が家からはこんでくることになつた。	同上		彼ハソレヨリ数月タダズシテ忽チ大男トナリテ其頭檜ノ梢ヨリモ高カリキ偶々獣ヲ探サントスル時ハ籜ニ跨リ兩側一攫ニ潰シ殺シタリスル大男ナレバ家ニ帰ルコト能ハズ常ニ山ノ洞穴ニ起臥シ母ナル人ハ日々食物ヲ持チ運ビケリ
3	177	それで足りないときは、部落の他人の家を訪ねてゆく。さういふとき、大鍋に肉を山盛り盛つて饗応しないと大変である。暴れまはつて、家から家財から叩きつぶしてしまふ。部落の人たちも彼の姿を見かけると、逃げ隠れるやうになつてゐた。			(該当箇所なし)
4	177	もつとも、部落のためにまるきり役にたたないかと言ふと、必ずしもさうばかりでもなかつた。なが雨で河水が氾濫したやうなとき、人は彼に頼んで、腸物を橋とし、その上をわたつた。	タイ ヤル 族 前編 300	ハル ス ノ 話	昔ハルスト称スル巨人アリテ巨大ナル一物ヲ所持シケリ驟雨ニテ河水一時ニ氾濫スル折ニハ社人ハ彼ヲ呼ビテ其一物ヲ借りテ橋トセリ
5	177	しかし、巨人は女の場合は黙つて、首尾よく向ふ岸にわたしてやるが、それが男の場合であると、時折だしぬけに橋をゆさぶつて、激流に墜したりするのである。	同上		然ルニ男ノ渡ルヲ見レバ一物ヲ震ハシテ河中ニ墜スコト度々ナリシガ女ノ時ハ決シテスルコトナク首尾ヨク彼岸ニ渡ヌヲ常トセリ

6	177	また女が畑で野良仕事をしてゐる時などは（十八字空白）その場で殺される女もすくなくなく、この巨人の噂を聞くだけでも、女子供は、慄へあがるくらみであつた。次第に部落ぢうの、鼻つまみになつてきた。他人ばかりではない。自分自身も、その大きな体に自己悪強を感じるやうになつてゐた。	ダイヤル族 前編 323	ハルスノ話	社ノ婦女ヲ誰彼ノ差別ナク姦スルニ至レリ社人モ其ヲ知りテハ捨テ置キ難ク
7	178	「こんな生れもつかぬ大男になつてしまつたのも、もとはと言へば、母のせゐだ」ある時、彼は考へた。そして、食物をはこんできた母親をひとひねりに殺してしまつた。かうして親殺しの大罪まで犯したが、家人はおろか、部落の若者たちも彼をどうすることもできなかった。その馬鹿力の前には誰も手だしができないのである。	曹族 108 ～ 109	鞆丸ヲ抜キテ大男トナリシ話	元来スノ如キ大男トナリシハ全ク母ノ為ナレバ母コソ憎ケレトテ或日母ノ来ルヲ見テ忽チ双手ニテ頭ヲ締メシカバ母ハ忽チニ室息セリスル親殺ノ大罪ヲ犯セドモ家族ハ愚カ社ノ杜丁等モ如何トモスルコト能ハズ其儘打チ捨て置キアイシガ
8	178	ある時、他の部落の凶蕃たちが部落に襲撃したことがあつた。凶蕃たちは洞穴に寝てゐる巨人を見つけるとびつくりして、がやがやさわいでゐたが、間もなくでんでに矢をつがへると、穴からはみ出てゐる巨人の両脚をめがけていつせいに放つた。数十本の矢が彼の両脚につきささつた。遠まきにして眺めてゐた部落の若者たちは、考へた。「こんどこそは、さすがの大男も参るだらう」しかし、彼はのそりと起きあがつたかを見ると、けろりとした顔で、脚にささつてゐる矢を抜いてしまつた。そして、凶蕃をかたつぱしから、もみつぶしてしまつた。	同上		或時凶蕃来リテ彼ノ足ヲ射タリシカバ社人ハ之レ幸ト思ヒシモ東ノ間ニテ凶蕃ハ反リテ殺サレタリサレド
9	179	しかし、その巨人も、間もなくあるとき病にかかつてしまつた。ひどい熱が出、体ぢう湯気でも吹きだしさうにまつ赤になつた。さすがの巨人も今は弱りはて、洞穴のなかに横になつたまま、うなつてゐた。丁度そこへ、たくさんの一百匹近くもの熊が、群をなして現れた。熊たちはたちまち彼を襲ひ、喰ひころしてしまつた。	同上		其後病ニ罹リ稍ヤ弱リタル時百匹ノ熊来リテ彼ヲ喰殺セシトナン

第3話「巨人伝」は、中心を曹族の「鞆丸ヲ抜キテ大男トナリシ話」に拠り、またダイヤル族の「ハルスノ話」を加えた物語である。「鞆丸ヲ抜キテ大男トナリシ話」の筋は、次のようなものである。——元々体型の小さな男があり、村の笑い者にされている。母親は村で豚に施す方法に従つて、男の鞆丸を抜き取つて、大男にしようとした。数経たないうちに、彼は大男に

なった。身長が檜の梢より高くなって、獣を探そうとする時は溪谷を跨り、逃げて出てくるものをさらって潰し殺す。このように大きくなった以上、家に帰ることもできず、常に山の洞穴に起居し、母親に毎日食べ物を持ってきてもらう。しかし男は、このような大男になったのはすべて母親のせいだと憎んでいたので、母親の頸を締めて殺した。男は親殺しの大罪を犯したが、家族も部落の壮丁も何もできなくてそのままうち捨て置くしかできなかった。ある日凶蕃が来て彼の足を射た。それを見て、社人は幸いだと思ったが、彼は凶蕃を殺した。その後病気に罹って少し弱くなった時、百匹の熊が来て彼を喰い殺した。――

「ハルスノ話」は、タイヤル族の各部落で広く伝えられているものである。この「ハルス」は、ある族の神話ではもともと巨人とされ、ある族の神話ではただ大きな陽物を持つ男とされる。これらの伝承に共通するのは、「洪水の時、社人に頼まれ陽物を橋として渡す。女なら首尾よく渡すが、男なら揺らして落とす。好色漢なので機織る女を見たら姦殺するから社人は捨て置きがたく、焼き石を吞ませて殺した」というストーリーである。

これら二つの原話の内容は明らかに異なる。辜丸を抜かれる男は、自分の異常な大きさにコンプレックスを抱き、それは心の消えない暗い影となっている。他方、大きな陽物を持つハルスは、自分の異常な大きさに何の屈託もなく、平気で悪いことをする。しかし地平はこの二つの話を一つの新しい話「巨人伝」にまとめた。

この新しく作った話において、辜丸を抜かれた大男はそのコンプレックスで母親を殺した上、多くの婦女を強姦して殺した、とんでもない悪漢とされている。しかし村の人は洪水が来た時、平気で人を殺したりするこの悪漢に陽物を橋とするように頼む。悪漢の大きな体は多少、村に貢献できるようなものである。しかし陽物を橋にする時、女なら首尾よく渡すが、男だったら揺らして落としてしまうような、決して他人の言うままにするおとなしい人物ではない。しかしながら、「次第に部落ぢうの、鼻つまみになつてきた」巨人は、「他人ばかりではない。自分自身も、その巨きな体に自己悪強を感じるやうになつてみた」と、自己反省した上、どうやら深いコンプレックスを抱き、自己嫌悪に陥ったようである。

現実的に考えれば、巨人の性格描写に不一致なところも見られるが、これは二つの異質な神話を一つの神話につなぎ合わせたことによる不自然な設定によるものかもしれない。しかしこの設定によって、人を殺してもなお人間性と思考力が保たれている一つの楽天的な世界が現れたとも思われる。一方、多くの女性を強姦し、大きな陽物を持つ巨人の男性性は、強すぎるほど鮮明である。「穿山甲と猿」の話で示された睾丸と男性性の関係は、いくらか矛盾する部分もあるが、いずれもエロスの感じられる神話であろう。

さらに第6節には、以下のように、当時の検閲によって伏せ字にされた部分がある。「また女が畑で野良仕事をしてゐる時などは（以下十八字空白）その場で殺される女も少なくなく」と、女性に性的な暴力をふるうような筋が潜む部分である。この伏せ字部分は、戦後再収録した『太陽の眼』に「その大きな陽物をのぼしていたずらす」と書かれている。戦前に伏せ字にされた部分をそのまま復活したかどうかは不明である。だが、伏せ字にされることによって、当時の読者の想像力は却って残虐な面と性的な面にかきたてられた可能性もあるだろう。

(4) 「女の国」

【比較表(4)】『太陽征伐』—「女の国」と『蕃族調査報告書』との比較表

節名	頁	女の国	巻頁	題名	『蕃族調査報告書』
1	179	むかし。ある男が河岸に佇んで、魚をとつてゐたが、脚を踏み外して流れに落ちた。激流におしながされ、男は間もなくつひに海に出てしまった。大声をあげて、救ひをもとめたが、辺りには人影ひとつなく、応へるのはただ岸うづ浪の音ばかりであつた。運を天にまかせ、はてしない海原をただよつてゐると、間もなく、大きな鯨がやつてきた。鯨は彼をひと呑みにしてしまつた。	阿眉族 74	鯨ニ呑マレシ男ノ話	昔一人ノ男アリキ一日漁ニ出テ過リテ河ニ落ち流レテ海ニ出テシニ鯨来リテ男ヲ呑ミヌ
2	180	しかし、しばらくすると、鯨は排泄したから、男は糞とともに、再び海のなかにながし出された。ふつと、傍らに緑につつまれた小さな島が浮んでゐるのが眺められる。必死になつて、男は島に泳ぎついた	同上		然ルニコノ鯨或島ノ側ヲ泳キ居リシニ偶々大便セシカハ男ハ糞ト共ニ出テテ其ノ島ニ泳キ着キヌ

3	180	それはをかしなところで、女ばかりが住んでゐる島であつた。太陽が麗らかに照りわたつて、潮風が肌のところよい日、女たちは海岸に出、断崖の石にまたがつて存分に風をうける。すると、ひとりでに孕んで子供を産む。	タイヤル族前編324	カワワンノ話	昔カワワント称スル所ニ河風ヲ孕ミテ子ヲ産ム珍ラシキ女人ノミノ社アリケリ
4	180	産む子といふ産む子はすべて女なのである。鯨から排泄された男が、海岸にたどりつくと、ひとりの女が遊んでゐた。			(該当箇所なし)
5	180	見なれぬ異様な姿の人間が自分のまへにたちはだかつたとき、女はびつくりしてしまつた。しばらくの間はあきれたやうに、口もきかずに、男の体を眺めてゐた。	タイヤル族前編324	カワワンノ話	然ルニ婦人ハ其男ノ股間ニ異様ノ物ノサガリアルニ氣ツキテ
6	180	島に住んでゐた女たちが続々男のぐるりに集つてきた。(五字空白)無体!と思ふが大勢に氣おされてどうにもならない。男は間もなく弱りはてしてしまつた。	同上		其態ヲ見居タルケワワンノ者共ノ騒ギハーカナラズ我モ我モト珍ラシキ男ノ側ニ寄り来リ手ヲ引キ足ヲトリ妾ニモ試ミサセヨト無理無体ニ陰莖ヲ握リテ股間ニ挿入シ中ニハ泣クモアリ笑フモアリ斯クテ数人ヲ試シミニ男ハ早ヤ勢力尽キテ
7	180 ~ 181	そこへひとりの齢老いた女がやつてきた。老女は自分だけがひとり取りのこされたのを恨み、鋭い鎌で男の(二字空白)をきりとつてしまつた。	同上		運レテ来リタル一婦人ノ云フヤウ数多ノ中ニ妾一人ヲ残ストハ侮辱スルモ程コソアレコノ根ミ報イデ置クベキカト急ギテ家ニ帰リシガ躑躅テ再ビ出デ来リ小刀モテ男ノ陰莖ヲ根元ヨリブツリト截リ取りテ
8	181	そして、男を竹垣を幾重にもはりめぐらした小屋のなかにおしこんでしまつた。その後は、食事時がきても男が木の根や草の根ばかりしか与へられないのである。			(該当箇所なし)
9	181	いつばう老女は、乾したものを珍重してゐたが、ある日、木の枝にかけてゐたところを海鳥のために攫はれてしまつた老女は島での物笑ひの種となつた。	タイヤル族前編324	カワワンノ話	数日後ニ彼ハソヲ取り出シテ日ニ晒シ乾カサントテ木ノ枝ニ掛ケシニ鳥来リテ攫ヒ行ク彼ハ悔メドモ今更詮術モナク呼ベドモ鳥ハ来ラズ追ヘドモ及バズ泣ク泣ク家ニ帰リタレバケワワン社ノ者共皆々ドツト笑ヒケリ
10	181	かくて、十年ばかりもたつたが、或る日女たちが、小舎の傍らでささきやいてゐるのを男は聞いた。」「			(該当箇所なし)

		あしたは豚を屠ることにしよう」竊に思ふやう、「この島にはほかには一匹の豚もみそうにはない。ひよつとしたら、自分を殺すのではないだろうか。」今は、一刻も猶予すべきではなかつた男は小舎をやぶつて、海岸へとのがれ出た。しかし、もちろん、海辺には一艘の船の姿も見えはしない。男は途方にくれた。			
11	181 ～ 182	すると、間もなくであつた。だしぬけに、断崖の下に大鯨の背が浮びあがつた。鯨は言つた。「俺の背に乗れ。故郷へ連れて帰つてやらう」碧瀾を蹴り、一瞬千里、鯨はたちまち故郷の岸邊に着いた。	阿眉族 74	鯨ニ呑マレシ男ノ話	男一日海岸ニアリシニー匹ノ大鯨来リテ汝ヲ故郷ニ伴ヒ帰ラン(略)遂ニ故郷ノ海岸ニ着ク
12	182	故郷の部落についてみると、山川草木まったく変りはてて、見るもの、聞くもの、すべてこれ新である。いとしい妻子がよろこび迎へてくれるだらうと、期待して帰つた、なつかしいわが家にはまるで見も知らぬ人が住つてゐる。部落のどこにも親戚故旧だれ一人としてするものもみないのである。さすがに呆れはてて、とり巻く部落の人たちに自分の経験してきた事情を詳に語ると、人人もやうやく合点することができた。某と呼ばれる部落の男が河に落ちて、行方不明になつたことは確かに聞いてゐる。しかし、それは昔むかしの出来ごとで今彼の家に住まつてゐるのは、その男の五代の孫であるといふ返事であつた。			(該当箇所なし)

「女の国」とは、ある男が鯨に飲みこまれた後に排泄され、女ばかりの島に着いたという筋からなる話である。その粗筋を示す。——多くの女に囲まれた結果、男はすっかり弱くなつた。そこに男と一緒になれなかつた老女が来て、男の陽物を切つた。老女が切つた陽物を干していた時、海鳥に攫われて島の物笑いの種になつた。一方、監禁された男は十年後に、殺される危険を感じて自力で脱出した。海岸に行ったら一頭の鯨が出てきて、故郷まで連れていってくれた。しかし故郷はすっかり変わっており、自分の家に住んでいるのは、自分の五代あとの孫であるといわれた。——

この話も「巨人伝」と同じく、地平は異なる話の合併を試みている。一つは阿眉族の「鯨ニ呑マレシ男ノ話」で、鯨に呑まれた後、排泄され、孤島に着いた男が、また一頭の鯨に背負われて故郷に戻り、鯨に餅と白鶏の供えを要求された話である。すなわち「女の国」の第1、2節と第11節に当てはま

る部分である。もう一つの話は、物語の中心となる「女の国」についての話である。地平はタイヤル族の「カワソノ話」を参照したと思われる。彼が創作した第4節、第8節は、各節をつなぐ機能をはたしている。注目されるのは、原住民の口承伝説で、年月の経過につれて曖昧化されていた「時間」を、地平が「十年」とはっきり定めたことである。島での十年は普通の部落の十年ではなく、自分の五代後の孫と同時代に当たるというのである。これによって、結末の第12節と呼応して、「女の国」という異質な空間で、時間も歪んだことが明らかにされている。

この設定は、地平がこの神話集に施した最大の工夫だと考えられる。しかし創作とはいえ、この歪んだ時間の設定は中国や日本の民間伝承によく見られる筋であり、それほど新鮮な発想でもない。「女の国」の住人皆が「断崖の石にまたがつて存分に風をうけ」、一人で孕んで子供を産む話と類似の観念も各国の民間伝承にも見られる¹⁹。

その影響か、原話の中ではただ「子ヲ産ム」と記されるだけで、産まれた子の性別についての記述は見られないが、地平は自分が創作した第4節で、「産む子といふ産む子はすべて女なのである」と「女の国」の存在を合理化している。

(5) 「牝猿」

【比較表(5)】『太陽征伐』—「牝猿」と『蕃族調査報告書』との比較表

節名	頁	牝猿	巻頁	題名	『蕃族調査報告書』
1	182	むかし。あるところに、猿を情人とする変りものが住んでゐた。山へ狩に出かけ、暇を見ては猿と会ふのをたのしみにしてゐるのである。狩から帰ってきたとき、この男はただの一度も胆をもって帰ってきたことがない。			昔一人ノ男アリケリ出猟スルモ胆ハ一度モ持チ帰ラザレバ妻ハ不思議ニ思ヒ

2	183	妻はいぶかしく思った。「どうして、胆をもつては帰らないのですか。家でいつしよに食べるわけにはゆかないのですか」しかし、夫はてんでとりあはうとしない。あまりをかしいので、ある日、妻は夫のあとをつけてみた。	武 裔 族 前 編 第 一 部 75	猿 ト 契 リ シ 男 ノ 話	如何ナレバ胆ノミ何時モ取り除クヤ家ニ帰リテ食スルモヨカランモノヲ怪シキハ夫ノ仕業ヨト怨ミ且ツ疑ヒツ、或日夫ノ後ヨリ竊カニ追跡セシニ
3	183	山に入った夫は、声だかく呼んだ。「アヌーイヌー、アポー」すると、たちまち辺りの樹の枝から一匹の牝猿が嬉嬉として降りてきた。そして、夫がさしだした胆をとつてうまさうに食べた。			夫山ニ入ルヤ「アヌーイヌアポー」ト声高ニ叫ブ面白キ事ヲ云フモノカナト暫シ様子ヲ睨ヘバ一匹ノ牝猿出デ来リ夫ノ手ヨリ胆ヲ取りテ食シ嬉テ（兩人重ナリ合フ）
4	183 ～ 184	あきれはてた妻はいつさんに駆けて家に帰ると、夫の衣をまとい、一本の針をもつて、もとの場所へと行つた。夫は山林ふかか狩に行つてゐるらしい。妻は夫の声に似せて、「アヌーイヌ、アポー」と叫んだ。牝猿はすぐに降りてき、彼女の傍らによりそつてきた。			妻モ呆レテ物ヲモ云ヘズ其俣家ニ帰リ一本ノ針ヲ携ヘテ再ビ山ニ赴キ元ノ所ニ著クヤ「アヌーイヌ、アポー」ト叫ビシニ
5	184	男が来たと思つて喜んでゐる牝猿の体に、女は隠しもつてみた針を鋭い勢ひでさした。あくる日、夫はうちしをれた姿で帰つてきた。			猿ハ男ノ来リシコト思ヒテ飛ビ出デシヲ妻ハ針ニテ猿ヲ刺シ殺シ其屍ヲ家ニ運ビテ隠シ置キヌ翌日夫ハ山ニ行キテ猿ヲ呼びシモ来タズ如何ナレバ今日ニ限り来ラズヤ不思議ヨト家ニ帰リシニ
6	184	妻は言つた。「けふは、あなたの牝猿はあなかつたでせう。ほら、そこにあますよ」見ると、そこには牝猿の屍がなげだされてある。夫ははじめて、永い間の悪夢がさめた。夫婦なかは、ふたたびむつまじくなつた。			妻出シヌケニ今日ハ猿ハ居ラザリシナラン物モアラワニ猿ト契ルトハ何事ソ男ノ恥辱ナラズヤ汝ノ情婦ハ此所ニアリテ猿ノ屍ヲ引キズリ出シテ夫ヲ戒メケリ

「牝猿」は、猿と結ぶ男がおり、そのことが妻にばれたという話である。原話の武裔族「猿ト契リシ男ノ話」をそのまま口語訳したような内容となっている。男が猿を呼ぶ時の「アヌーイヌ、アポー」も原典のままである。ただ、男が動物の胆を牝猿に食べさせて、「二人重ナリ合ウ」という一句は省かれている。

反対に、地平によって付け加えられた部分もある。男が牝猿と交合することについて彼は、原話にはない男の心情描写を「猿を情人とする変りものが住んでゐた。山へ狩に出かけ、暇を見ては猿と会ふのをたのしみにしてゐるのである」と付け加えた。原話ではただ、妻が「猿ノ屍ヲ引キズリ出シテ夫

ヲ戒メケリ」で終わったのに対して、地平は「夫ははじめて、永い間の悪夢がさめた。夫婦なかば、ふたたびむつまじくなつた」と付け加えている。後述するが、このような省略と付加の工夫は、神話に基づいて楽天的な南方像を築くと同時に、詩的な表現効果を狙ったものだと考えられる。

(6) 「雷神キワイ」

【比較表(6)】『太陽征伐』—「雷神キワイ」と『蕃族調査報告書』との比較表

節名	頁	雷神キワイ	巻頁	題名	『蕃族調査報告書』
1	184	むかし。ある家にジワイと呼ばれる美しい娘があた。雷神のキワイは、天空を翔けてみるうちに、この娘に眼がとまつた。キワイは美しい若者に化け、下界に降りてくると、ジワイに結婚を申しこんだ。ジワイも秀麗な若者の姿を見ると、たちちのぼせあがつてしまひ、結婚を承諾した。二人は夫婦になり、キワイはその家の入り婿となつた。	ダイヤルキワイノ族後編170	雷神キワイノ話	昔キワイト称スル雷神天ヨリ降り給ヒテジワイト称スル或家ノ娘ヲ娶リ給フ
2	185 ～ 187	ある日、キワイは姑にむかつて言つた。「これから、山にでて開墾しませう」「ぢやあ、わたしも婿殿に加勢しませうかな」姑は大喜びでキワイを山に案内した。山につくと、キワイは謙も嶽ももたず、ただ、林のまんなかたに、つつたつてふんぞり返つたばかりであつた。そして、胸もやぶれよとばかりに息を吸ひこんだかと思ふと、向ひの山肌むかつて、力いつばい、それを吐きだした。たちまち辺りいつばい繁りに繁つてあた樹木は、まるで、暴風に吹きまくられでもしたやうに、一本残らず根こそぎにたふれてしまつた。			彼或日姑ニ向ヒ今ヨリ畑ニ出デテ開墾セント思フガ我家ノ山ハ何レナルカト尋ヌ姑モ大に喜ビソハヨキ心ガケナリ山ハアソコ指示シツツ妾モ共に行キテ助力セントテヒタヒタ後ヨリ従ヒ行キシニ彼レ山ニ到ルヤ鎌ヲモ手ニセズ鋸ヲモ持タズ林ノ真唯中ニ立チ稍稍ソリ身トナリテ胸モ裂ケンバカリニ氣息ヲ吸ヒソレヨリ大声ヲ発シケルニサシモ鬱々タリシ森林モサナガラ暴風ニ吹キ荒マレシ如ク皆倒レ

つづいて、キワイが息を吐くと、たふれた樹木ははねとばされ、向ひの山裾にきれいに積み重ねられてしまった。驚き、あきれてゐる姑を尻目に、キワイは籠のなかからユフガホ、ヒヨウタン、キウリの種をつかみだして、耕地せましとばかりまきつけてゆく。いくらか、怒つたやうな顔つきをして姑は言った。「キビか、ヒエならばだが、こんなものを、どれほどまいても役にたたんぢやないか」しかし、キワイは笑つてゐて、母親の相手にはならなかつた。

収穫時がやつてきた。キワイはひとりで畑に行き、ユフガホ、ヒヨウタン、キウリの実をもぎとつて、家にはこぼと、表のあき地に山とつみかさねた。姑はあきれたやうに、それを眺め、ひとりでぶつくさつぶやいてゐた。「妙なものを、こんなにたくさん食べられるものか」母親の愚痴には耳もかさず、キワイはせつせと、収穫物を陽に乾かした。

五六日たつと、陽に乾いた夕顔をキワイは家のなかにはこんできた。そして、その一つをとつて、刀でわつた。なかにはコメと、アワと、ヒエとがあふれるくらいいつぱい詰つてゐる。姑は前にこぼした愚痴のことも忘れて、体ちゆうでよろこんだ。しかし、間もなくすぐにまたびつくりしなければならなかつた。夕顔の中に、キワイは太い腕をぬつとつづこんだかと思ふと、生のまま米を口にはこぼうとするのである。「まてまて、婿殿せつかちな。生とはあんまりちや、炊いて食べてはどうかな姑はキワイの腕をおしとどめ、無理に米を鍋に入れさせると、火の上に載せた。

間もなく鍋は沸騰したが、突然であつた。耳もつぶれるかと思はれるほどの音がし、鍋は破裂した、と、見る間に人も家も跡かたもなく吹きとばされてしまった。家が消えた跡の赭土色のあき地には、山芭蕉だけが一本残つてゐて、その青い葉を夕べの風になびかせてゐた。

二度目ノ氣息ニハ倒レタル樹木皆飛ビ上リテ付近ノ叢中ニハネ去リヌスクテ彼ハ徐徐ニ籠ノ中ヨリ夕顔、瓢、胡瓜ノ種ヲツギツギニ取り出シテ耕地狭シト一面ニ播キ始メタリソヲ見タル姑ノ驚キ限リナク斯カリ物ハ如何バカリアルトモ何ノ役ニモ立タザルモノヲ稗カ黍カナラバイザ知ラズ余リノ愚カサヨト小言ヲ言ヒシニ婿ハニツコト笑ヒナガラ母上ヨ心ナ痛メ給ヒソト手ヲ振りテ打チナダメ急ギ家ニ帰リソレヨリ二度草ナド取りシ程ニ早ヤ夕顔ハ熟シテ

収穫時トナリタレバ婿一人畑ニ赴キテ夕顔、瓢、胡瓜ノ数々ヲモギ取り運ビテ家ノ前ナル庭ニ列ベシニ姑ハ震ヒ戦キ斯ク多クノ夕顔ヲ妾ハ食ヒ尽シ得ズト愚痴ヲコボセシモ彼ハ耳ニ掛ケズ今ニ見ヨト云ハヌバカリノ顔ツキシテ庭ニ広ゲテ乾カシタリソレヨリ数日後乾キタル

夕顔ノ一ツヲ刀ニテザツクト截リシニコハ如何ニ中ニハ米ト粟ト充滿ス今ノ今マデ小言ヲ云ヒシ姑モソヲ見テ後悔シ良キ婿ヨト心竊カニ喜ビシガ婿ハ夕顔ノ中ヨリ粟ヲ掴ミ出シテ生ノママニテ食セシヲ見ルヤ又モ呆レテ思ハズ知ラズ待テ待テ婿殿ト腕ヲ捉ヘテ制シ生ニテ食セズニ炊ゲヨト無理ニ鍋ニ入レテ炊ガセシニ

間モナク大音響ヲ発シ鍋ハ愚カ家マデモ焼失シテ跡ニハ山芭蕉ノ葉ノミ青々ト茂レリトナン

「雷神キワイ」も、殆どが原話の、タイヤル族「雷神キワイノ話」のままである。例えば、原話の最後の一文「家マデモ焼失シテ跡ニハ山芭蕉ノ葉ノミ青々ト茂レリトナン」は、「雷神キワイ」の最後の一文でも「家が消えた跡の赭土色のあき地には、山芭蕉だけが一本残ってゐて、その青い葉を夕べの風になびかせてゐた」となっている。両話の類似性は、この比較からも分かる。これまでの「太陽征伐」「女の国」「牝猿」の最終部分に明らかな改変がみられることと対照的である。だが、これは原話の末尾が詩的描写であることと無関係ではない。

(7) 「老人の恋」

【比較表(7)】『太陽征伐』—「老人の恋」と『蕃族調査報告書』との比較表

節名	頁	老人の恋	巻頁	題名	『蕃族調査報告書』
I	187 ～ 190	むかし、ボルボルンといふ老人が住んでゐた。なにひとつ気のきいた財産とでももつてゐなかつたが、ただ一匹だけ、脂のたまた、太つた豚を飼つてゐた。同じ部落にマルラバといふ美しい娘がある。マルラバは老人の豚がたべたくてたまらなないのである。	排 灣 族 323 ～ 324	ボ ル ボ ル ン ノ 話	昔ボルボルント称スルー一人ノ老人アリキ巨大ナル豚ヲ所有セリ然ルマルラバノ娘ハ如何ニモシテ其ノ豚ヲ得ンモノト一策ヲ案ジ
		ある時、老人にねだつたものだ。「あなたの豚を、あたしのために屠つてはくさいませんか」美しい娘を見ると、老人は年甲斐もなく、心が動くのをかんじた。「ああ、いいとも、おまへさんのためなら……」と、いふわけで、老人はたちまち豚を屠つてやつたものである。娘は言つた。	同上		或日老人ニ向ヒ妾ノ為ニ豚ヲ屠ラズヤト云ヒシニ老人ハ我意ニ従ハバ何物ヲモ拒マズ豚ヲ屠リテ饗スル如キハイトハイト易キコトナリト言フ其時女ハ諾ト答ヘタレバ老人モ喜ビテ豚ヲ屠リタリ
		「料理ができるまで外でまつてみてください。すぐだから……できたら、いっしょに食べませう」娘は肉を小舎の中に運び入れた。老人は胸をわくわくさせて、表でまつてゐた。	同上		娘ハ其肉ヲ屋内ニ運ビテ妾一人ニテ料理スベケレバ老人ヨ暫ク外ニアリテ待テト云ヒシカバ彼ハ其言ニ従ヒ外ニアリテ待チ居タリ

<p>衰れな老人をまたせて置いて、しかし、娘は豚の肉をひとりで平げてしまった。娘は頭の間から一匹の虱をとって、言ふやう、「お前の命は助けてあげる。そのかわり表でボルボルンさんがなにか訊ねたらハイと答へるんだよ」裏口から娘は、ひそかに逃げだしてしまつたのである。</p>	<p>排 湾 族 323 ～ 324</p>	<p>ボ ル ボ ル ン ノ 話</p>	<p>娘ハ麩テ料理シ悉ク肉ヲ食シタル後一定ノ虱アルノミ之レニ何事ヲ問フモ「ウン」「ウン」ト答フルノミ</p>
<p>表の老人は問もなくいららしてき、催促してみた。「料理はまだかな」と、なかからは「ハイ」といふ返事である。老人は我慢してまつよりほかに仕方もなかつた。しかし、いくらまつても、娘は中に入れとは言はない。「まだかな」「はい」押し問答をくり返したのち、いぶかしく思つて老人はなかに入つてみた。なかには一匹の虱があるばかりである。腹をたて、老人は裏口から娘の跡を追つた。</p>	<p>排 湾 族 323 ～ 324</p>	<p>ボ ル ボ ル ン ノ 話</p>	<p>彼モ始メテ欺罔ラレタルヲ知リテ怨ヲ晴サンモノト直ニ娘ノ後ヲ追ヒシガ</p>
<p>娘が川をわたらうとした時であつた。ふつとふりかへつてみると、老人はすぐ後ろに迫つてゐる。娘は河水のなかに小用して置いて、対岸にあがつた。すると、河水はにはかに沸騰し、熱湯一時に氾濫した。老人は河をわたることができない。</p>	<p>排 湾 族 323 ～ 324</p>	<p>ボ ル ボ ル ン ノ 話</p>	<p>偶々河水一時ニ氾濫シテ渡ル能ハズ娘ハ対岸ニアリテ罵ル</p>
<p>くやしきのあまり、老人は傍らの石の上に陽物を置くと、小石をひろつて叩きつけた。陽物からは火を發し、炎の間から無数の蜂がとびちつた。蜂はいつまでも、その後部落の人たちを苦しめたさうである。</p>	<p>排 湾 族 323 ～ 324</p>	<p>ボ ル ボ ル ン ノ 話</p>	<p>老人モ今ハ耐ヘガタク側ナル石ヲ陰莖ニテ衝キタルニ其石凹ミテ徑一尺深七寸ノ穴ヲ生ゼリ彼ソレヨリ家ニ帰リ途中ニテ陰莖ニササリシ苜ノ刺ヲトリテ髒ニ入レソレヨリ社内ヲ廻リテ酒ヲ饗スベケレバ皆々集レト振レタリ社人モ酒ト聞キテ喜ビ来リ集ル麩テ人々ノ集ルヤ老人ハ髒ノ蓋ヲトリシニ中ヨリ蜂飛ビ現レテ処キラハズ人々ヲ刺シテ苦シメタリ</p>

「老人の恋」という浪漫的な題名にもかかわらず、話の内容は、一匹の豚のために一人の老人が若い娘に騙されたというものである。話の筋は、排湾族チャチャアブス社の頭目チャチャウデデが話した「ボルボルンノ話」とほぼ一致する。だが、この話をつくる際に、地平が参照した原話がもう一つあることが分かった。排湾族のバリラヤン社ビカルカラギヤン、デブラガン、

パリブルンによる「婦女ニ欺カレシ翁ノ話」である。

二つの原話の筋は相似性を持っているが、細部においては少し異なる。まず、「ボルボルンノ話」では虱を使って娘が老人を騙しているのに対し、「婦女ニ欺カレシ翁ノ話」では、南京虫を以下のように使っている。

其上ニ一匹ノ南京虫ヲ置キテ云フヤク若シ人來リテ妾ヲ呼ババ汝妾ニ代リテ返事セヨト女ハ其ヨリ其処ヲ逃ゲテ隠レタリ間モナク翁來リテ婦女ヲ呼ブ南京虫ハ内ヨリ「オイ」ト返事ス翁入リテ見ルニ唯一匹ノ南京虫アルノミニテ婦女ノ姿ハ見エザレバ大ニ怒リ直チニ彼ノ後ヲ追フ²⁰

また、娘が川の対岸まで逃げる際の描写は、「ボルボルンノ話」ではごく簡単に「偶々河水一時ニ氾濫シテ渡ル能ハズ娘ハ対岸ニアリテ罵ル」で終わっている。しかし「婦女ニ欺カレシ翁ノ話」では、娘が小用すると川が沸騰するという点では一致するものの、以下のように異なっている。

婦女ハ逸速ク川ヲ渡リ対岸ニアリテ翁ニ來ルヲ待ツ翁ハ氣息ヲキラシテ駆ケ來ル婦女其ヲ見ルヤ川ニ降りテ放尿シタレバ水ハ忽チ沸騰シテ湯トナリヌ翁ハ岸ニアリテ渡ル能ハズ暫ク躊躇スルヲ婦女見テ己ガ股間ヲ開キ翁ヲ早く來リテ執行セヨト罵ル²¹

さらに、騙された上に、川の対岸まで逃れた女に罵られ、怒りのあまりに取った老人の行動については、二つの原話はいずれも「側ナル石ヲ衝キタル」であるが、その続きが異なっている。「婦女ニ欺カレシ翁ノ話」では、岩に濛々たる煙が生じて穴が開いた、とする。また、「ボルボルンノ話」では石が凹み、陰茎に刺さった苺の刺を酒の甕に入れて蜂が出て酒宴に来た人々を苦しめた、となっている。

これらに対して「老人の恋」は、次のような最後となっている。

くやしきのあまり、老人は傍らの石の上に陽物を置くと、小石をひ

ろつて叩きつけた。陽物からは火を發し、炎の間から無数の蜂がとびちつた。蜂はいつまでも、その後部落の人たちを苦しめたさうである。²²

火は「婦女ニ欺カレシ翁ノ話」の「濛々たる煙」によるものであろうが、「穴」に該当する記述はない。また、炎から出てきて人々を苦しめた「蜂」は、「ボルボルンノ話」中で酒甕から出てきた「蜂」と符合しよう。したがって、これは二つの原話を参照した上での、地平の創作だと考えてよからう。

(8) その他

【比較表(8)】『太陽征伐』の他の短編神話と『蕃族調査報告書』との比較表

作品	頁		巻頁	題名	『蕃族調査報告書』
猪の腸	190	むかし。猪はたくさん蚯蚓を食つた。その蚯蚓があつた長い猪の腸になつたのである。	武 箭 族 前 篇 239	猪ノ話	昔猪オオクノ蚯蚓ヲ食セシニ皆腸トナル即チ猪ノ腸ハ元蚯蚓ナリ
鉢巻の怪	190 ～ 192	むかし。二人の女が髪を洗はうといふので、めいめい竹筒に水を入れ、頭にかけて置いた。すると、いつの間にか一人の女が頭に巻いてみた鉢巻がとけて、腸になつてしまつた。腸はその女の脚にまつはりつくと次第に上の方へと這ひあがつてゆく。女はびつくりして大声でわめいた。他の女もあわてふためき、懸命に腸のはしをひつばつたが、腸は離ればこそ、つひに一端が届いてしまつた。	卑 南 族 55	鉢巻変シテ腸トナリシ話	昔二人ノ女アリキ共ニ髪ヲ洗ハントテ水ヲ竹筒ニ入レ頭ニカケ居タリシニソシカ鉢巻解ケテ見ル見ル腸トナリ一人ノ婦人ノ足ニ纏ヒ着キ更ニ上部ニ登ラントス他ノ婦人驚キテ之ヲ除カントテ其端ヲ引キシニ堅ク纏ヒ着キテ解キ去ルコト能ハスカカル間ニ他ノ端ハ陰部ニ入リス
		折から傍らの小舎の上には一羽の鳩がとまつてゐたが、「ととととる、アキリツルナヌアリスライ」と啼いて、女ははやくしたてた。女は恥かしさのあまり、まつ赤になり、両手で顔をおほはずには居られないなんといふ因果なことであらう。その後も腸はけつして女から離れようとはしなかつた。			折柄鳩ハ屋上ニテトトトル、アキリツル、ナヌアリスライト鳴ク

		<p>女は間もなく孕む、つづいて、男の子を産んだ。子供は大きくなつたが、ある日、彼は腸に言った。「お父さん、たまには外に出て、薪でもひろつてきてくださいよ」あまりしつこく頼まれるので、腸もやむなく脚から下りて、外に出かけようとした。</p> <p>その機を外さず、女は屋根の上に逃げのぼつた。そのことに気がつくつと、腸は薪ひろひはやめ、またしても執念ぶかく女の跡を追つて、屋根の上のぼつてゆかうとする。今はしかたもなかつた。女は上から熱湯をそそぎかけて、腸をころしてしまつた。</p>		<p>間も無くシテ一子ヲ生ム其子成長シテ父ニ対ヒテ云ウヤウ「暫ク母ヲ離レテ薪ヲ採リ来ラレヨ」ト父ハ己ムナク母ノ脚ヲ下リテ外出ス</p> <p>母ハ其機ヲ見テ屋上ニ飛ヒ登リシニ腸モ共ニ登ラントセシカ上ヨリ湯ヲ注キシメテ遂ニ死セリトナン</p>
蛭	192	<p>むかし。 男が煙草を吸つてみた。 男の顔に蟲がとまつた。 男の煙管ではらひ落そうとした。 煙管の火が蟲の尻にくつついた。 その蟲を、今、人は蛭と呼んでゐる。</p>	<p>獅設族 411</p>	<p>蛭ノ話 昔或者煙草ヲ喫シ居タルニ一匹ノ虫飛ビ来リテ顔ニ止マリタリヨリテ煙管ニテ払ヒシニ其火虫ノ尻ニツキタリ今其虫ヲ蛭ト云フ</p>
猪と女	193 ～ 194	<p>むかし。夫婦があつたが、 妻は極めて（二字空白）な女であつた。 妻はある日、夫に言った。「畑を猪にあらされるといけませんから、あしが見張りに行つてきますわ。こん晩は畑小屋に泊つてくるかもしれません」妻は出て行つたまま、二三日も帰つてこない。どうしたことかと思つて、夫は畑に行つてみた。すると、意外にも畑はめっちゃくちゃに荒されて、薯の影さへ見えないのである。怒つて妻に言った。 「お前は家に帰つて居れ。おれがかはりに見張りする」</p> <p>妻が家へむけて帰ると間もなくであつた。ふつと、気がつくつと、小屋の一隅に置きわすられた妻の衣の下から一匹の猪が、ぬつと現れ出てきた。いい獲ものだ、といふわけで、夫は早速傍らの槍をとつて投げつけ、猪を殺してしまつた。瞬間、彼はすべてを了解してしまつた。家に帰り彼は猪を料ると、胆をとつて刀のさきにつきさし、妻のまへにさしだした。「おい、これを食べないか」</p>	<p>武藏族前編第一部 232 ～ 233</p>	<p>夫ヲ欺キテ猪ト戯レシ婦ノ話 昔或所ニ夫婦アリサシタル (該当箇所なし) 事モナク暮シ居タリシガ或日妻ハ夫ニ向ヒ妾今ヨリ畑ニ赴カン猪来リテ薯ヲ損フベケレバトテ夫ノ止ムルヲモ聴カズ急ギ畑ニ行ク其後夫畑ニ赴キテ見レバ人ノ番セントモ思エヌ程荒ラサレ アレバ驚キ家ニ帰リテ妻ヲ呼ビ汝ハ毎夜何所ニ行クヤ畑ハ猪ノ為ニ荒ラサレテ薯ノ影ダモナシ今日ハ我レ行キテ汝ニ代ラント 其夜ハ夫小屋ニアリテ見張りセシガ偶女ノ「タボク」ヲ振リシニ猪来ル好キ獲物ト槍ヲ振ヒテ投ゲツクレバ誤タズ其腹ヲ刺シヌ其ヨリ家ニ帰リ肉ヲ切り胆ヲトリテ刀ノ先ニ刺シ汝此胆ヲ食ハズヤト妻ニ差出セバ</p>

		<p>衰れな、悲しげな顔をして妻は横をむいた。夫はその刀で妻の脾腹をついた。腹はやぶれて四匹の猪の子が生まれた。中で二匹は山に逃げて野猪となり、家に残った二匹は飼ひならされて豚となった。</p>			<p>妻ハ食ハズト振り向キヌソノ隙ニ夫ハ妻ノ腹ヲ衝キシカバ中ヨリ四匹ノ猪飛ビ出デテ二匹ハ外ニ逃レ二匹ハ屋内ニ入ル外ニ逃ゲタルハ山ニ入り内ニ入りタルハ豚トナリテ今ニ社ニ止マル</p>
蛙の化身	194 ～ 196	<p>むかし。ある娘のところに、毎夜、美しい男が通つてきた。娘は許してみた。ある夜、男の言ふやう、「友だちをあつめて踊りがしたいのだ。帯を貸して貰へまいか」帯を娘は貸してやつた。いよいよ踊りがある、といふ夜であつた。かねて男に聞いてみた場所に娘は行つてみた。するとそこは暗い、だだつびろい原つぱにすぎない。「誑らかされたのかしら。悪い趣味ね」つぶやきながら娘は、家に帰らうとした。そのときであつた。黒い雲間を浮きつ沈みつしてゐた月が、ぬつと、雲を破つて現れた。辺りいぢめんは急に明るなつた。ふつと足もとをみると、大勢の蛙たちが自分の帯をひつぱりあひながら、咽喉もさげよ！とばかりに啼きさけびながら踊つてゐる。娘は帯をつかみ、蛙たちをふり離れた。しかし、なかで一匹の大蛙だけはいつか帯をはなさうとしない、しつかりにぎつたまま、ぶらさがつてゐるのである。しかたもなしに、娘は傍の石に力まかせに蛙をたたきつけた。娘は家に帰つた。あくる晩、男がやつてきて言つた。「ゆうべはこうも、ひどい目にあつたよ」みると、頭に負傷してゐる。蛙などにだまされてゐたのかと気がついて、娘はくやしうしてたまらない。「このど蛙め！」かいつばい娘は男を足蹴にした。すると男はたちまちもとの蛙の姿になり、「や、見やぶられたか」つぶやきながら、わりとあつさり、びよんびよん跳ねながら表に逃げたして行つた。</p>	曹族 100 ～ 101	蛙 契 リ シ 娘 ノ 話	<p>昔或家ニ一人ノ娘アリケリ或夜美シキ男忍ビ來リテ其寢室ニ入り馴馴レシク娘ノ側ニ寝ネタリ娘モ憎カラズ思ヘバ男ノ為スガ儘ニ任セケリ斯クテ男ノ來ルコト數日一夜男ノ云フヤウ我近日中ニ友ヲ集メテ踊セン時ヲノ道具ニ用キント思ヘバ汝ノ帯ヲ貸シ給ヘヨト娘モ跳踊ト聞キテハ寢食ヲモ忘ルル所ナレバソノ何時何所ニテ踊ルヤナド尋ネシニ男モ喜ビテ日ハ何日場所ハ何所ト教ヘ帯ヲ借りテ歸リヌ娘ハソレヨリ指折リ算エテ其日ノ來ルヲ待チ居タリ山又山ノ中ニテモ日月ノ照ラヌコトハナク其日其日ト過ギ行キテ指定ノ日トハナリヌ其時娘一人竊ニ指定ノ場所ニ行キ家ヤアルト見渡セド茫漠タル平地ニテ蛙ノ鳴キ聲ノミ聞ユ悔シサト腹立タシサトコキ雜ゼタル胸ノ思フ誰ニ暗サン術モナク木ノ根ニ腰ウチ掛ケ鉢巻ニ挟ミル煙管ヲ取り出シテ煙ヲ吸ヒツ吐キ暫シ休ミシカバ胸ノ苦モ薄ラギテ次ニ男ノ來ラン日ニハ必ず怨ヲ述ベ體モ碎ケン許ニ打チヤラント決心シテ履ヲ廻シ歸ラントエセシニ稍々離レアル所ニ數多ク蛙集リテ男ニ與ヘシ我が帯ヲ引キ延バシ各々手ニテ確ト握リ裂ケン許ニ口ヲ開キテ鳴キ居タリ娘ハ其様ヲ見テ呼ウガテヤト近寄り帯ニ手ヲカケ振り拂ヒシニ數多クノ蛙ハ驚キテ皆叢サシテ跳ネ行キシモ一疋ノ大ナル蛙ハ確ト握リヲ容易ニ離レザレバ娘ハ力ニ任セテ石ニ打ツツケシニ蛙ハ頭ニテモ打チタリシカ其所ニ倒レテ唯手足ヲ動シ居タリ娘ハ帯ヲ携ヘテ家路ニ急ギ</p>

				<p>又其夜例ノ男又來リテ娘ノ室ニ入ルヤ今日ハ慘キ目ニ遇ハサレシモノヨ汝ハ我等ガ踊ヲ見ント欲ツセバコソ其意ニ從ヒ其場所ヲ教ヘシニ我ヲ斯シクマデ石ニ打チツクルトハ情ナキ振舞ナリト頭ヲ抑ヘツツアア頭痛烈シク眩暈シテ何物モ見エヌ程ナリト唸リシカバ娘ハ驚キ夜ヲ夜ヲ通ヒ來ル男ハ蛙ナリシカ我身ハ蛙ノ為ニ汚サレシカト思ヘバ悔シサ憎サイヤ増シテコノ蛙奴ト蹴ツケシニ男ハ双足上ゲテ床ノ下ニ落チ元ノ形ニ立チ還リ四ツ足ニテ跳ネ去リシトナン</p>
		比較的淡白な性格の蛙だったのにちがひあるまい。		(該当箇所なし)
怠 け 者	196 ～ 197	<p>むかし。男があつた。性来の怠けものであつた。</p> <p>ろくに働くこともせず、腹が空いた、といつては甘藷など生のまま食つてゐる有様であつたから、部落の人たちは噂し合つてゐたものである。「あれでは、獣となるよりしかたがないだろ」</p> <p>それでも、ある日、男は珍らしく耕作に出かけた。しかし、土地を掘らうとすると、馴れない仕事のために鍬の柄はたちまち折れてしまつた。「これではならない」といふわけで、男はほかの鍬に変へてみた。しかし、変へても、変へても、鍬の柄を折つてしまふ。既に四挺もの鍬を無駄にしてしまつた。あんまりいまいましいので、男はその鍬をもつて、自分の尻をたたいた。すると、鍬はそのまま尻にささつて、尾となつた。「これは…」と、驚いて、尾をふりはなさうとし、身ぶるひすると、こんどはたちまち全身にあさましい毛が生えてしまつた。</p> <p>男はいよいよあわてさわぎ、山なかふかく逃げ隠れた。以来といふもの樹の枝から枝へどとび歩き、果実をあさる身とはなつたのである。猿の顔はふだんはさうでもないのであるが、人に遭ひさへすればたちまちまつ赤になつてしまふのも、さすがにあれでかういふ境遇が恥しいからである。</p>	タイヤル族前編 307	<p>怠惰者ノ猿トナリシ話</p> <p>昔社ニ一人ノ怠惰者アリケリ</p> <p>(該当箇所なし)</p> <p>一日畑ニ出デテ耕セシニ鍬ノ柄折レタリソレヨリ他ノ鍬トリテ使用セシニ同ジク又折レタリ斯克テ四本ノ鍬ノ柄ヲ折リシカバ彼イマイマシトテ折レタル柄ニテ己ガ尻ヲ衝キシニ其柄抜ケズシテ尾トナリ全身ニハ毛生エテ見ル見ル中ニ形変ジテ猿トナリケリ</p> <p>(該当箇所なし)</p>

榧 の 木 ・ 榧 の 木	197 むかし。好色な男がゐて、女とさへみれば ～、乱暴を働いた。部落の人たちは機会があ 198 れば懲らしてやらうと考へてゐると、ある 日男は一人の (二字空白) な女を伴つて、 自分の家のなかへ入つて行つた。これに気 がつくと、部落の人たちは大声で罵りさわ ぎ、今にも打ち殺さんばかりの気配を示し た。さすがの男もこれにはあわててしまひ 、俄かに姿を変へて榧の木になつた。女も をかしなところを見られたので、うろたへ てしまひ、榧の木になつてしまつた。(二 字空白) な女を榧の木といふのはすぐにな よなよと男にしなだれかかるからである が、(二字空白) な男のことを榧の木とい ふのは説明するまでも無いであらう。	武 崙 族 前 編 第 一 部 235 ～ 236	悪 戯 者 ノ 話	昔郡大本社ニ一人ノ悪戯者アリ常ニ 婦女ヲ攫ヒテハ姦セリ或時彼平素ノ 如ク一人ノ女ヲ捉ヘテ姦スルヲ人ニ 見ツケラレ且ツ罵倒セラレシカバ稍 耻シカリケン其場ヲ遁レントシテ足 ヲ踏ミ出セバ次第次第二榧ノ木ト變 ジ女モ亦榧ノ木トナル我等今淫乱者 ヲ榧ノ木及榧ノ木ト云フハ之ニヨル 而シテ淫乱男ハ忽チ陰莖ヲ硬クシ女 ハ又忽チ軟クナルコト榧ノ木ノ如シ
---------------------------------	---	---	-----------------------	--

残る短い7話を『太陽征伐』所収順に一つの表にまとめたものが、比較表(8)である。「猪の腸」は「穿山甲と猿」の第1節と同様に短い神話である。「むかし。猪はたくさん蚯蚓を食つた。その蚯蚓がああ長い猪の腸になつたのである」は、原話の「昔猪オオクノ蚯蚓ヲ食セシニ皆腸トナル即チ猪ノ腸ハ元蚯蚓ナリ」の現代語訳のようなものである。

二番目の「鉢巻の怪」は、『太陽征伐』の中で一番奇想天外な話だといえよう。なぜなら、女性と結ばれたのは異種だからだ。単なる異種なら「牝猿」「雷神イワイ」などでも異種交合の神話が見られるが、この話での異種は生き物の枠から逸脱して、無生物の「鉢巻」と鉢巻から変化した「腸」であつた。原話は卑南族の「鉢巻変シテ腸トナリシ話」と思われる。二人の女性が頭を洗う時に、解けた鉢巻は腸になり、一人の女と結ばれた。その後、子供が生まれても腸はずっと女の体を離さなかつた。子供が成長して、父である腸に薪を採りに来るように言った。そこで腸はやっと女の足を降りた。女はすぐ屋上に逃げて、追いかけてくる腸に熱湯を注いで殺した。「鉢巻の怪」は、原話と筋がほとんど合致している。しかし原話では「折柄鳩ハ屋上ニテトトトル、アキリッル、ナヌアリスライト鳴ク」と呪いをかけるかのような部分を簡潔に記しているが、作品では「折から傍らの小舎の上には一羽の鳩がとまつてみたが、『ととととる、アキリツルナヌアリスライ』と啼いて、女をはやし立てた。女は恥かしさのあまり、まつ赤になり、両手で顔をおほ

はずには居られない」と言葉を尽くして記述している。よって、鳩と女と対話ができるほど人間と生物の距離が近く、古い世界の感覚を表現しようとしたと思われる。

「蛍」には、獅設族の「蛍の話」という原話がある。両者の筋はほぼ一致するが、その文章表現には違いがみられる。原典「蛍の話」は伝承の記述という体裁を取るが、「蛍」では詩的に改編されている。これによって、「蛍」は詩情豊かな童話のような作品となった。

「猪と女」には、「夫ヲ欺キテ猪ト戯レシ婦ノ話」という原話がある。「夫ヲ欺キテ猪ト戯レシ婦ノ話」と「猪と女」ともに、妻が猪と結ばれたことを知った夫が猪を殺し、妻も殺した。刀で突かれた妻の腹から生まれた四匹の猪のうち、二匹は山に逃げて野猪となり、二匹は家に残ったから豚となった、という話である。原話との違いは、原話に見られない「妻は極めて（二文字空白）な女であつた」という一文が付け加えられた点である。しかしこの妻に対して加えられた形容語は、発表当時、伏せ字にされた。戦後出版した『太陽の眼』に収録された話では「多情」となっている。「牝猿」において、猿と結ばれた男に対して「変わり者」と表現したことを考えると、地平の男性優位主義がはからずも露呈された結果となっている。また、同じ「牝猿」中で、猿と結ばれた男は結局、長い悪夢からさめて、夫婦の仲がまたむつまじくなったと付け加えられるが、猪と結ばれた女は原話のままに殺されたとする。これもやはり、地平の男性優位主義の考えが無意識に働いたためかもしれない。

「蛙の化身」は、曹族阿里山蕃の話「蛙ト契リシ娘ノ話」を原典とする。話に大きな変動は見えないが、表現上、原話よりも簡潔に記すため、長い叙述に代わって短い言葉で表示したところがある。例えば、「ソレヨリ指折り算エテ其日ノ來ルヲ待チ居タリ山又山ノ中ニテモ日月ノ照ラヌコトハナク其日其日ト過ギ行キテ指定ノ日トハナリヌ」を、「いよいよ踊りがある、といふ夜であつた」と省略した。このように、言葉を控えることによって、読者の想像に委ねる部分を多くする効果をねらったのであろう。

一つ見逃すことのできない点は、この話の最後の一句に、作者の肉声表れていることである。同じように「蛙の化身」の最後の一行「比較的淡白な

性格の蛙だつたのにちがひあるまい」も、話し手の感想が混じったものである。この性格云々の感想は、娘に正体を見破られたために「びよんびよん跳ねながら表に逃げだして行」った一匹の蛙に対して発するものであり、神話を伝承する原住民の語り手を相対化する視点の存在を提示している。読者の文脈の理解の仕方によって、ストーリーにユーモアな効果をもたらそうとした地平の狙いであると考えられよう。というのは、これらの神話に施した文飾は、他所にもみうけられるような、読者の想像力を引きだそうとした工夫であると考えることができるからだ。

「怠け者」の原話は、タイヤル族の「怠惰者ノ猿トナリシ話」である。怠け者が畑に行き、鋤の柄が四本折れた。折れた柄を一本尻に突き、とれなくなって尾になった。全身には毛が生え、そのまま「猿トナリケリ」、と結んでいる。この話において地平は、怠け者が怠ける様子を「ろくに働くこともせず、腹が空いた、といつては甘藷など生のまま食つてゐる有様」と説明した上に、猿になった後の境遇も以下のように付け加えた。

男はいよいよあわてさわぎ、山なかふかく逃げ隠れた。以来といふもの樹の枝から枝へととび歩るき、果実をあさる身とはなつたのである。猿の顔はふだんはさうでもないのであるが、人に遭ひさへすればたちまちまつ赤になつてしまふのも、さすがにあれでかういふ境遇が恥しいからである。²³

このように、原話の簡潔な叙述を潤色し、理由を付け加えるのも、文学的修飾が理由だと考えられる。この付け加えとは対照的に、最後の「樫の木・榛の木」では、好色の男を「樫の木」と呼ぶ理由について、武崙族の原話「悪戯者ノ話」では「淫乱男ノ忽チ陰莖ヲ硬クシ」とはっきり説明しているのに対して、地平は「説明するまでも無いであらう」と略した。これは原典のまま記せば、検閲を通過しないことを予測したのかもしれない。しかし「樫の木・榛の木」の中に示される「説明するまでも無いであらう」は、好色な男が樫の木になったという文脈上、読者の想像力を性的な面に導く効果があることも見逃すことができない。

3.

以上、比較表を参照しながら見てきたように、『太陽征伐』は、種々の神話から性的な話を中心に取り上げてまとめたうえで、様々な工夫が施された、多彩で、奇抜な神話小説集となった。素材の選択から考えても、性的要素にかかわる話が多い。では、地平が奇抜な神話を集めて構築しようとした「南方」像には、いったいどのような要素が含まれているのだろうか。

作品は、以上分析してきたように、生命力を強く感じさせる男女の肉体に関わる話が大きな割合を占めている。特に男性の陽物についての描写と象徴性が、作品中でしばしば強調されている。地平が『台湾蕃族調査書』から性的な神話を多く採集した結果、作品は一つの身体化された世界として表れている。これは、世界各地の原住民族の文化に普遍的にみられる原始的な身体崇拜や陽物崇拜の傾向と合致する。地平の作品に再現された原住民の素朴な神話も、人々の「認識」ではなく「感覚」で構築された古い世界の雰囲気漂わせている。

「太陽征伐」において、勇士らは長年跋涉した果て、とうとう「鼠の陽物」の矢を使い、「太陽征伐」の壮挙を完成した。「老人の恋」では、老人の陽物から恨めしさのシンボルとしての「蜂」がどっと飛び出て、部落の人を悩ませた。これは、陽物から出る精子の比喩なのかもしれない。また「鉢巻」という無生物や「腸」という器官は、細長いその形態からいって、いずれも陽物の変形記号である。「穿山甲と猿」の猿も、女の国に辿り着いた男も、去勢されて象徴的な男性性を失った。このように、文中には陽物が様々な形で語られている。地平が、意図的にエロスと性的開放性を持つ南方を神話作品によって表現しようとしたことは明らかである。『太陽征伐』に展開された世界は、人間の存在を「精神」の原理ではなく、男性の陽物および異種との交合に象徴される「肉体」の原理で構築した世界と言ってもいいだろう。

しかし注目すべき点は、地平が同時に、この「肉体」の世界に抽象的な「南方文学」の要素、つまり精神的な「南方憧憬」をあてはめようとしていることである。その結果、この原住民神話を再構成した神話作品において、植民地台湾の原住民の世界の表象は「観念的」な南方像と「肉体的」な南方像の両方を、曖昧な形で併存させることになったのである。このことは、地平が

「肉体的」な作品の末尾に施した「詩的」な文飾にも表れている。地平は原住民神話を「身体的」に再構成する一方で、作品中で己の肉声と感受性を語ることによって、読者の性的な想像力と共鳴を求めようとした。

こうして地平は、原住民神話の再生産によって、「明るさ」や「行動的描写の卓越さ」「感覚的な詩情」「神話的空想力」、そして「熱情的飛躍性」などの南方特有の特性が溢れた原始世界を構築しようと試みた。この南方的な世界に自身の「南方憧憬」を託し賞賛することで、「南方文学」樹立の重要性を帝国の読者に伝えようとしたのである。地平は、奇抜な「ハナシ」を有する原住民の神話を「素朴、真卒なる古代の伝説」と認識し、意図的に「南方文学」として内地文壇に紹介したが、『太陽征伐』の神話世界は、ただ文明世界にほど遠い、一つの肉体的・原始的な世界としてのみ表象されてしまっているのではなかろうか。彼の意図にもかかわらず、身体的な神話を素材とする試みは、原住民社会への認識を一層珍奇することにつながるものであった。

4.

作品には、人間と異種の交合の話と排泄の話が多く取り入れていることから、地平の潜在意識も表されていると思われる。異種交合の話は、猿と人間の後家の女（「穿山甲と猿」）、猟師と牝猿（「牝猿」）、雷神とジワイ（「雷神キワイ」）、人間の女と鉢巻（「鉢巻の怪」）、人間の女と猪（「猪と女」）、蛙と娘（「蛙の化身」）など多彩に描かれている。

ここで注目すべき点は、異種交合の話が、人間と猿、猪、蛙という馴染みの深い動物との接触であることである。「牝猿」「猪と女」の中の猟師と不倫した牝猿や妻と不倫した猪は、すこしも人間の気配がなく、動物のままである²⁴。このような獣姦に近いイメージのある神話では、いわば恋愛という精神的なレベル、すなわち「美」という境界とは程遠く、ひたすら素朴な身体的な世界が描かれており、「穢れ」のインパクトが強いものになっている。

『太陽征伐』を通して、異種交流の話のほか、もう一つ強調された描写として、読者に「穢れ」のイメージを与えたのが排泄である。「女の国」の原話には元々鯨に吞まれて排泄された男の話はなかった。地平は、他族の「鯨

ニ呑マレシ男ノ話」から取材したのである。実際に『太陽征伐』だけではなく、地平の他の神話的作品でも、排泄物と排泄器官に関わるプロットは必要不可欠な要素と言えるほど描かれている。地平の初めての童話「窪地のうへの白雲」は、肛門を持たない昔の人々が蒸気を吸って生きている世界である。そして、アロブゴという肛門を持つ男が薯を食い始め、更に人々に熱い鉄棒で肛門を作ってあげたという話である。「太陽の眼」は、カラベツという男が、「太陽の油断を見すまし、その眼玉を盗んで食べてしまった。その後カラベツは厠にはひるたびに、糞便のなかからその眼玉をさがしだし、水あらひしてはまた嘔みくだす習慣であつた」²⁵という話である。

こうして、人間の孕む日常卑近な排泄物、あるいは馴染みの深い動物との交合は、地平の作品中で強調され、彼の台湾原住民世界の表象を支配した。このような原住民神話を再構成した作品と地平の「南方憧憬」には、いったいどのような関連性があるのだろうか。

人間の「憧憬」や幻想性については、フロイトの精神分析の学説をはじめ究明が続いている。例えば、竹田青嗣は、人間の世界をエロスの的に経験された秩序と捉えたうえで、近代の学説を踏まえて世界の幻想性を論証し、排泄物に対する人間の感受性について語っている。

子供が排泄物を「キタナイ」と感じるようになるのは、人間の生得の感覚として美醜感が発達してくるからではない。排泄物は「日常世界」からはみ出す「ケガレ」の世界を象徴する。それがキタナイのはそれが「ケガレ」ているからであって逆ではない。このように、美醜の感覚もまた、何らかの仕方で、「日常世界」とその向こう側の「禁止された世界」という、人間の幻想世界の成立にかかわっている。²⁶

竹田はフロイトの精神分析を踏まえ、人々の幻想世界は日常世界から追放された「聖的な世界」とその反射像の「穢れの世界」に分けられると主張している。竹田の論を援用すると、地平の台湾原住民神話に取材する作品は、そこに描かれた排泄物や異種の交合によって「キタナイ」というイメージが

強化される限り、そこには「穢れの世界」、つまり近代文明のもとで秩序化された内地の世界と対置される一つの「禁止された世界」が成立する可能性がある。地平の作品において、内地世界との異質性を求める姿勢は、彼の「南方文学」が帯びる中央文壇への反発の側面に通底するものである。

5.

中村地平は、昭和 15 年に「南方文学」を樹立しようとする意欲を、以下のように述べた。

僕自身が考えている文学の指標であるが、それは南方文学の樹立ということである。いったい僕は文学は風土的な特徴をもつべきであるという独逸浪漫派の意見にはなほだ共感をかんじる者であるが、現在日本に行われている文学の大部分は、東京的な、植民地的な都会文学か、さもなくば北方的な、観念的な心理主義文学かである。(略) 日本文学の大部分がすべて安手の都会主義か、深刻癖のつよい心理主義ひといろに塗りつぶされているのを眺めて、憂鬱でないというわけにはゆかない。²⁷

この「文学は風土的な特徴をもつべき」だという文学理念は、当時の日本文壇への批判と結びついている。地平の「南方文学」は、同時代の文壇、すなわち「北方的」な文学や「観念的な心理主義文学」と対立する構図を持っている。そこで彼は、台湾の原住民社会と内地社会との距離をはっきり意識しながらも、観念的に近代を反転させようとし、結局のところ無意識的に「穢れの世界」に近い異界としての「南方」を憧憬していると考えられる。

一つの幻想世界は、往々にして現実世界での不安や挫折の反映として成立すると言われている。当時、地平が「南方文学」を前面に押しだして対抗しようとした中央文壇は、彼の目には「すべて安手の都会主義か、深刻癖のつよい心理主義ひといろに塗りつぶされている」²⁸状況に置かれていた。それはまさに竹田が指摘したような、「精神の価値が過剰に評価される」「観念的」文学が溢れる状態にあった。

近代では、内面的な“魂”のつながりおよび、その目標となる「理想」が強調されるプラトニック・ラブに姿を変えた。プラトニズムでは、近代的な心身二元論に対応して、まず精神と肉体が明瞭に分離され、精神の価値が過剰に評価されるのだ。（中略）ここでは、ロマン的世界の「内面化」「理想化」ということが生じているのである。²⁹

とすれば、彼の「南方憧憬」には、台湾の原住民社会像を近代の極端な精神主義を転覆させるべく、身体性に力点を置く世界として把握しようとする一側面が存在すると考えることができる。しかし近代の「精神」と「肉体」の二元論は、地平の「南方憧憬」に基づいて描き出された彼自身の「内地」と「植民地」の表象にそれぞれ当てはまる。竹田は「ロマン的世界には『憧憬』という情緒がつきまとい、またそれが失われたものと感じられるとき、『郷愁』（ノスタルジー）という情緒をも作り上げる」、「ロマン的世界はもともとその幻影的な美しさ、きらびやかさで味わいの対象である」³⁰と、ロマン的世界や「憧憬」・「郷愁」が作り上げた幻影的な美しい世界との密接性を指摘している。無論この世界は、自我にとって「美しく素晴らしい『ほんとうの世界』という姿をとるのである。かつて日本浪漫派の同人であった地平は、ドイツ浪漫派の影響を強く受けていた。彼自身もしばしば小説の中で引用するように、彼の「南方憧憬」にはドイツ浪漫派の詩人の南方憧憬が投影されていると考えられる。竹田も次のように指摘する。

ロマン的世界は、現実世界との対照によって「いま、ここ」には存在しない“向こう側”の世界として心のうちにとめ置かれる。そこから「憧憬」「郷愁」という独特の情緒が生み落とされるが、この情緒は、人間にとって生の世界を味わう基本的な様式となるものである。³¹

地平の「南方憧憬」は、近代の「精神」の昇華された観念の産物である。

この「南方憧憬」に基づいて作り上げられた台湾原住民の表象は、「理想化」されたものである。この点において自家撞着をきたしている。したがって、地平が憧憬して理想像として求める「明るく」「詩情的」で、「熱情的」な「南方」とは、実はロマンを「内面化」「理想化」した、きれいな「聖なる」世界の反射像としての「禁止された」「穢れた」肉体的世界だと見ることも可能である。地平の台湾神話で強調される「ケガレ」の表現は、彼が文学上で表現しようとした「南方的である」ことにつながるようになってしまっている。

本作品に沿えば、地平のロマンは、無意識の働きが作動することによって作品に示された身体的な世界観の創出に注がれているといえるだろう。台湾原住民の神話と出会うことによって地平は、身体的で、原始的な自然の秩序の世界を「美しく素晴らしい」ものとして文壇、あるいは内地の関心を喚起しようとしたと推察できよう。

竹田が示唆したように、「『ケガレ』は単にこの世の秩序をけがす『悪』ではなく、『聖なるもの』の秩序の“違反”ということの本質的に含んでいる」³²のだとすると、「穢れの世界」は「聖なる世界」の反対物であり、「聖なる世界」からの脱出願望を含んでいる。地平の潜在的な願望が介入しつづ成り立った神話的作品世界は、社会の忌むものとしたタブーを直視するような題材が多く見られる。よって、彼が意識的に作ろうとした「明るさ」「感覚的詩情」「神話的空想力」などの特性を含む「南方」の表象は、「ロマン的」な世界像との間で深い矛盾が生じる。原住民族世界像を差異化することによって地平は、無意識的に一つの穢れの世界を創造したといえるのである。

宗教的な感情がすぐれて人間的な感情であるとするれば、オカルト的な恐怖も人間に固有のものだ。そして、これらの感情は人間が「異界」という世界の領域を持つことに由来する。³³

この竹田の指摘に沿うならば、「異界」の成立はいうまでもなく人間の不安にかかわっている。「幽霊や物の怪の世界、伝説や神話、宗教が語る彼岸、あの世、そして、心霊や怪奇の世界」³⁴等はすべて異界であり、「人間の自

私の秩序の壊れ」³⁵を暗示し、不安を唆す。地平による台湾原住民神話の再構成は、結果として内地日本人の「台湾蕃族」の原始世界への恐怖と好奇心を加速させたと言い切っても過言ではないのである。

さらに、読者がこのような身体的要素と密接する筋の話を読むと、台湾原住民神話を、ひいては台湾原住民の世界を肉体的な異界だと思い、ごく自然に植民地台湾、あるいは台湾の原住民の原始性・未開発性を感じたと考えられる。この作品には、地平が意図していないにもかかわらず、一つの「穢れ」の世界が表象されているからである。

6.

中村地平は、『太陽征伐』を収録し、昭和16年9月に墨水書房より刊行した『台湾小説集』のあとがきに、「南方に郷愁し、南方に憧憬し、南方を愛してゆくことは、一生、変わらない」³⁶と明言した。いうまでもなく、この「郷愁」と「憧憬」というのは、失われたもの、欠落しているものに対してしか感じられない情緒である。この「郷愁」と「憧憬」は、自分の郷里が九州地方という「南方」であることに起因する一種の反中央・反近代の感情となる。「反近代」という基底に、地平と「日本浪漫派」の同人との接点が見出せる。しかし一方で、「穢れの世界」や原始世界への回帰を図る地平は、教養と古典的な「明治精神」を持つ日本へと回帰しようとする「日本浪漫派」の同人とは、根本的に異なるスタンスにあるといえよう。

このような反中央の感情に基づいて創作した「南方文学」は、図らずも帝国の言説と通底するものを持つ。神話作品の素材として使ったのは、「臨時台湾旧慣調査会」によって出版された『蕃族調査報告書』³⁷の中の各蕃社についての記述である。報告書には神話だけではなく、言葉や風俗も詳しく掲載されている。だが、その膨大な資料は、文化人類学の学問分野では貴重な資料とはいえ、人類学及び文献学とオリエンタリズムとの内部関連性がすでに明らかにされているように、「帝国」の権威付けの戦略と深く関わっているのである。

観察あるいは記録を通して調査対象を特徴付け、図式化することは、監視と管理の形式と深く関連するものであり、それは「帝国」の支配行為の形式

にほかならない。例えば、曹族阿里山蕃の神話の中に話者不明の「弓ヲ折りテ日本人ト別レシ話」がある。太古の洪水の時代、祖先が日本と知母撈社に移住することとなり、別れの際に一本の弓を折って、半分ずつ持って行った話である³⁸。この話は、「帝国」日本のイデオロギーの中にある「同源説」と巧妙に合致していることも興味深い。よって地平の作品は、調査書の中の原住民神話を再生産すると同時に、それに付随するイデオロギーも必然的に再生産することになった。

地平は、原住民の神話を「南方文学」の一つの道具として使い、エロシ的南方像を意図的に築いた。その神話的作品によって、台湾原住民族世界像は一層コード化された。そのコードの内容とは、地平が意図して伝えようとした「明るさ」「感覚的詩情」「熱情的な飛躍」といった抽象的な特徴よりもむしろ無意識のうちに表された「聖なる世界」の内地とは対照的な、「身体的」な「穢れ」の異界であった。

もう一つ注目し値するのは、『太陽征伐』と他の神話的作品の改変である。かつて、地平が昭和14年に発表した「太陽の眼」を分析したところ、登場人物の対話、風景、細かい動作、そして心境の描写などは、彼が施した文学的な修飾であることが分かった³⁹。特に「太陽の眼」では、原住民の野蛮性と受けとられるような行為の描写にあたって、地平なりの理由付けや彼らの心理描写を行っている。しかし「太陽の眼」の翌年に発表した『太陽征伐』では、地平の創作の部分が大幅に減少した。言い換えれば、昭和14年の「太陽の眼」においては、内地社会の認識の枠組みを通して原住民神話を捉え、原神話の残酷な要素を薄めて再生産しようとしたが、『太陽征伐』においては、認識の枠組みを自分なりの南方観に取り替えるようになった、ということである。

そして素材は身体的なものが格段に増えた。昭和9年に発表した「人類創世」の神話集は、同じく台湾原住民神話から取材したものだが、性的な面に触れた話はほとんどない。一つだけ、兄妹の近親相姦に触れた話があるが、「大変、仲のよい兄妹があつた。仲がよい、といふのも、極端で、二人は事実上は夫婦であつた」⁴⁰と淡々と語るものであった。

この傾向から考えれば、『太陽征伐』は、露骨な性的描写はほとんど原典

のままであり、原典をほぼ忠実に再現しようとした作品だと言えよう。原住民神話に表れている原住民世界が、いくらか残虐性を帯び、近代社会の禁忌に触れるものだとしても、そのままの姿で原住民文化の価値体系として肯定しようとしたのである。地平は、原住民神話の再生産の過程で、近代社会の禁忌と大胆に直面するようになった。

地平の考えは、当時の内地社会の道徳観を超えたものだったといえる。その意味において彼の「南方文学」は、当時の文壇をはじめ、内地社会の均一化・秩序化した近代世界像⁴⁾を反覆させる意欲を意味している。同時に、神話的作品における語り方の変化は、地平の植民地観についての自省が反映されているのである。

註

1 本稿では、同じ題名を有する短編神話集の「太陽征伐」と区分するために『太陽征伐』と明記する。

2 「神話」と「伝説」の用語であるが、『蕃族調査報告書』では「伝説」を使用しているのに対して、地平は「伝説」と「神話」の両方を使用し、使い分けが行われているとは言えない。柳田国男によると、当時、口承伝説を行う人間が話を信じているか否かによって、「伝説」と「神話」の区別をつけるとされていた。本稿ではこの点については深く触れず、「神話」で用語を統一することにする。

3 西部図書（宮崎）1948年1月出版の単行本。

4 岡林稔「中村地平『台湾小説集』解説」（『台湾小説集』（『日本植民地文学精選集』〔台湾編8〕）、ゆまに書房、2000年9月、4頁）

5 「人類創世」の開巻にも「太陽征伐」という題名の序文があり、「太陽征伐」の内容を紹介している。

6 中村地平「人類創世」（『台湾小説集』前掲、79頁）

7 中村地平「民族的神話」（『中村地平全集』第3巻、皆美社、1971年7月、44頁）

8 中村地平「南方的文学」（『中村地平全集』第3巻、前掲、48頁）

9 岡林稔「『南方文学』の光と影」（『竜舌蘭』、2000年2月、60頁）

10 中村地平「人類創世」（『台湾小説集』前掲、78頁）

- 11 臨時台湾旧慣調査会編。全7巻、大正2年から大正10年にかけて刊行。
- 12 臨時台湾旧慣調査会の「佐山融吉と大山吉寿」両氏によって執筆された著書には、1923年に出版された『生蕃伝説集』もある。『蕃族調査報告書』に収められた神話をまとめて、伊能嘉矩の報告にもとづいて平埔族の説話が加えられたこの伝説集と中村地平の神話作品、および『蕃族調査報告書』との異同の比較考察は、後日の課題に譲りたい。
- 13 中村地平「太陽征伐(序)」「人類創世」(『台湾小説集』前掲、73頁)
- 14 同上、73頁
- 15 中村地平「人類創世」(『台湾小説集』前掲、79頁)
- 16 中村地平「太陽征伐」『太陽征伐』(『台湾小説集』前掲、162頁)
- 17 中村地平「穿山甲と猿」『太陽征伐』(『台湾小説集』前掲、168頁)
- 18 同上、175～176頁
- 19 石田英一郎の『桃太郎の母—ある文化史的研究—』(講談社文庫、1972年6月、155～156頁)は、女人國の昔話について詳しく検証している。その検証によると、宋代の『嶺外代答』や『諸蕃志』には「其ノ國ノ女人南風ノ盛ニ発ルニ遇ウヤ、裸シテ風ニ感ジ、即チ女ヲ産ム」と書かれている。これは中村地平の「産む子といふ産む子はすべて女」という描写と通じるものであり、興味深い。
- 20 臨時台湾旧慣調査会編「伝説」(『蕃族調査報告書』、1921年、351～352頁)
- 21 同上、351～352頁
- 22 中村地平「老人の恋」『太陽征伐』(『台湾小説集』前掲、190頁)
- 23 中村地平「怠け者」『太陽征伐』(『台湾小説集』前掲、196～197頁)
- 24 林彦卿『非情山地』(林彦卿出版、2002年4月、454頁)に、タイヤル族の「人畜通婚説(獸姦説)」を提起している。
- 25 中村地平「太陽の眼」(『台湾小説集』前掲、140～141頁)
- 26 竹田青嗣『エロスの世界像』(講談社、1997年3月、82頁)
- 27 「南方的文学」(『知性』、1939年9月)。引用は『中村地平全集』第3巻(前掲、48頁)による。
- 28 中村地平「南方的文学」(『中村地平全集』第3巻、前掲、47～48頁)
- 29 竹田青嗣『エロスの世界像』(前掲、106頁)
- 30 同上、104頁
- 31 同上、104頁
- 32 同上、106頁

33 同上、215 頁

34 同上、215 頁

35 同上、218 頁

36 中村地平「後記」（『台湾小説集』前掲、273 頁）

37 『蕃族調査報告書』第 1 部は 7 巻ある。ちなみに第 5 巻と第 6 巻の緒言は、地平が言及した当時の臨時台湾旧慣調査会の補助委員、佐山融吉によるものである。

38 原話「弓ヲ折リテ日本人ト別レシ話」は曹族阿里山蕃 120 頁によるもので、以下の通りである。

大古「バントゥンコア」（新高山）ニー軒ノ家アリキ四方ハ皆海ニシテ今ノ如ク山岳モ見エザリシガ何時シカ次第ニ水退キテ平地ヲモ現ハスニ至レリ其時我等ノ祖先ノ中水ノ退キタルヲ幸ニ他ニ移住セントテ赴ケルモノアリーハ知母（月勞）ニーハ日本ニ向ヘリ彼等別レニ臨ミー一本ノ弓ヲ取り出シ其中中央ヨリ折リテ知母月勞ニイキシモノハ上方ヲ日本ニ行キシ者ハ下方ヲ取りテ行ケリト

39 拙稿「『南方憧憬』と『帝国』の接点—台湾原住民神話に関わる作品・中村地平『太陽の眼』を通して—」（『国際日本文学研究集會會議録』第 27 回、2004 年 3 月）を参照されたい。

40 中村地平「人類創世」（『台湾小説集』前掲、80～81 頁）

41 成田龍一『近代都市空間の文化経験』（岩波書店、2003 年 4 月）の示唆を参照されたい。

(wenya75@hotmail.com)